

---

# HEAVEN ! ヘヴン ! HEAVEN !

coconeko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HEAVEN! ヘヴン! HEAVEN!

### 【Zコード】

Z5896A

### 【作者名】

coconeko

### 【あらすじ】

若干八歳の耳年増少女と、無駄に年を食っているけど見た目青年の、凸凹コンビがおくる、はちゃめちゃ探し物道中記。数々の障害苦難海賊王を乗り越えて、二人は無事に探し物まで辿り着けるのか?!

## 銃と少女と聖剣と + 海賊と? -

「どうしたらこう状況になるのかしらね?」

金色の、ふわふわの髪をゆらし、両の腕を組んだまま、少女は足元の青年を見下ろした。

「うひー、めんなさー」

ずれた眼鏡はそのままに、青年は背中を丸め、うずくまつたまま頭をかばうポーズを条件反射的に取つて、少女に見下されながら謝つた。

ちゃんと立てば、一人の身長差は頭三三分ほどもあるとここの、どうやらの一人の立場は身長とは関係がないらしい。

「あんた、年いくつだっけ?」

「・・・えつと?」

「じゃあ、あたしはいくつ?」

「やつつ?」

少女は額に青筋をたて、げしげしと青年の背中を蹴りつけた。

「あんた見た田どう見ても二十歳とくくに超えてるわよ!」

「あいたたたたー! やめてようつ!」

「どうやら、年齢差も関係がないらしかった。」

「ちょっと買いたい物に出かけたはずなのに、戻つて来ないから探しに来てみれば、何をどうしたらこうなるの?!」

「・・・不注意?」

「がつん!」

「げふー!」

少女は、今度は青年の背中を踏みつけた。

「お嬢ちゃんよ、俺らを無視しないでほいんだがな?」

無骨な露面の男が、二人の会話に割つて入る。

「あり、じめんなさい。でも、あんたたちの欲しいようなもの、悪いけど持つていないので」

振り返った少女の先には、数人のガラの悪そうな男たちが、にやにやと下卑た笑いを顔に張り付かせていた。

「ここは港町。

大きくもなく、小さくもない、よつて物資はそこそこあるが、警備もそこそこ。こういった港には、時々海賊なんものが立ち寄ることがある。

「一人は今、そんな海賊にからまれている最中なのであつた。

「そうかい？ ジャあしじうがねえな。そこの眼鏡とお嬢ちゃん、二人に来てもらうか。あんたら一人、いい値で売れそうだ」

髭の男がそう言つと、残りの海賊達が一斉にゲラゲラと笑い出す。暇つぶしに連れて行つて、最後には奴隸商人にでも売つてしまおうということだ。

「・・・そういう物騒なことを言われてハイ、ソウデスカなんてついていくわけがないでしょ！ セイン！ あれ！」

「えー？ キヤルあれ出すの？ この人たち一般人だし気が引けるんだけど」

「ごいん！」

変な音が青年の頭から発せられた。

少女に殴られたためだが、彼女は構わず一発目の拳を作る。

「こいつらのどこが一般人なのかしら？」

「分かりました！ ごめんなさい！」

涙目になりながら青年は立ち上がり、両の手を合わせる。

彼が、その合わせた手の平を、ゆっくりと離していくと、手と手の間の空間から何かが生まれ始めた。

まず姿を見せた柄を青年の左手に握られ、右手の平から、赤ん坊が生まれるかのように、彼のものであろう赤い液体でぬめ光る、鋭く長い刃が引きずり出されてゆく。

やがて、青年の血と体液を滴らせ、ずるりとその身を露わにした。ズぶズぶと、生々しく発生したそれを、少女はためらいもなく掴

み取り、その長く煌く刃身を海賊達に向けた。

それは一振りの剣だ。

「何だ？ 今のは」

人の手から抜き身の剣が生まれる異様な光景に、男たちは呆然とした。

「あしたちに目を付けたのが運のつきと思つことね」

少女は不敵に笑う。

「手品か？どうやつたかは知らねえが、その大刀、お嬢ちゃんには重いんじやねえのかい？」

男が少女に掴みかかるとした、その瞬間だった。

シユリン・・・！

軽やかな音色と共に、少女の姿が視界から消えた。

「うわあああ！」

後ろから聞こえた仲間の悲鳴に、男が振り返ると、信じられないことが起こっていた。

ベルトを切られてズボンを押さえる者、頭部のてっぺんにハゲを作られた者や、腕に巻いていたバンダナを半分にされた者と、一人一人がみな一様に、どこかしら切られている。肝心の自分は、いつのまにやら小刀を下げていたホルダーベルトをすっぱりと切られていた。

まさに電光石火。

十にも満たない少女の仕業とは思えない。

慌てて振り返れば、少女たちはもう遠くに逃げていくところだった。

「一体、何者だ・・・」

男は不本意ながら、キヤルと呼ばれていた少女の言つたとおり、あの一人に目を付けた不運を認め、後を追おうとはしなかった。

「キヤ、キヤル、もう大丈夫だよ」

「あ、そう？じゃあ、歩きますか」

息を切らせているセインとは対象に、キヤルはけろりとしている。

「若いつていいいなあ」

しみじみと呟くセインに、キヤルは歩調を合わせた。

「あなたはもう年寄りだもんね。多少は労わってあげるわ。でもね、何であんなのに絡まれているのよ」

「年寄りって、うう、傷つくなあ

わざとらしく胸を押さえる青年を、少女はすっぱりと無視をする。

「あたしがいなくたつて何とかできただんじゃないの？」

「だって、僕が手を出すわけにはいかないじゃないか」

「・・・あたしならいわけ？」

「う。ごめんなさい」

歩きながら、どちらが年上なのかわからないような会話を、二人は延々続けている。

「ほんと、セインなんか、引っ越し抜くんじゃなかつた」

「それはないよキヤル」

セインと出会つてから、すっかり口癖になつてしまつたそれを、キヤルはまた口にした。

### 聖剣・大賢者セインロズド

三ヶ月ほど前、封印されたこの伝説の剣が、何者かによつて数百年ぶりに解かれた。

そのうわさは、まことしやかに囁かれ、あまり広がりを見せていはない。

そもそもそのはず。

その当人たちが、実はコレである。

眼鏡をかけた、背の高い、おつとりした青年が、長い歴史の間、自身を封印し続けていた聖剣、セインロズドの正体であり、また、その封印を解いて、彼を永い眠りから目覚めさせたのが、この金髪の勝気そうな少女、キヤロットであった。

「岩に突き刺さつてたあんたを引き抜いてからとこりもの、ろくなことがないわ。聖なる剣つていうんなら、何かこいつ、奇跡とか何か起こせないの？」

「む、無理デス……」

「・・・分かつてゐるわよ。まじめに答えないでよ馬鹿バカしい」

二人の会話は宿に着いてからも続いていた。

「この宿も明日には出るんだから、しつかりしてよね

「うん。ごめんなさい」

素直に謝るセインに溜め息をつきつつ、キヤルは宿屋の部屋の扉を開けた。

小さな宿屋である。簡素で安くて、しかし食事はそこそこ美味しいかった。

「ここを離れるのは何となく惜しかったが、目的のために仕方がない。

「次はどこへ行くの？」

「そうね。船で海を渡つて、ここに行こうと思つの」

キヤルは、セインが買つてきた新しい地図を、歩きながら広げ、ばさりとテーブルの上に置いて、一点を指で示した。

「エルグランド島？」

「うん。名前が似てるでしょ？それに、本で読んだんだけど、ここつてちょっとした伝説があるのよね」

キヤルの声は心なしか弾んでいる。

「伝説？どんな？」

セインは地図を覗き込みながら、カチヤカチヤとお茶の用意を始めた。

「えつと、ね、この辺りの町や村には独特の風習があつてね？亡くなつた人をこの島に奉るので、そうすると、死者の魂は約束された地へ赴ける」

「ええ？それってお墓つて事だよね？やだなあ

「他にもあるわよ？ここでは昔から超常現象が見られるの

「超常現象〜？」

いかにも胡散臭いといつよつ、眉尻を下げるセインに、キャラ

はかまわず、明日出掛けのための準備を着々と進めてゆく。

「そ。天に昇る階段を見たとか、海の向こうへ列を成して飛び交う光を見たとか。何にせよ、何か手がかりがあるかもしれないじゃない? せつかく近くに来てるんだから、行ってみてもいいと思つわ」

「じゃあ、明日は船を捜すの?」

「はい、お茶、と言つて、手元にカシップを置くセインを、キャラはガバッと見上げた。

「そーよー船! すっかり忘れてたけど、やつきのあつら海賊じやがバツと見上げた。

「そうだね、いかにも海賊だつたよねー」

「ばきん!」

セインは右の脛を抱えて涙眼にうずくまつた。

「海賊つて言つたら港に停泊しているに決まつてゐるじょー。明日鉢合わせでもしたらどうするのよー」

「そんなんに怒らなくとも

見上げるセインを、キャラと睨む。

「左の脛も蹴られたい?」

「・・・イイエ」

ますます小さくなつてしまつたセインを、キャラは再び見下ろして、彼の用意したお茶を啜つた。

「・・・セインつて、お茶を淹れるのは上手よね

思わずカップの中を覗き込む。

ふんわりとした良い香りに鼻を刺激され、口に含めばなんとも言えないお茶の葉の、混じり気のないやわらかな味が広がる。

「明日早く出る」とあるわ。今日せまい飯食べたりせつと寝るわ

よ

早起きの漁師の船にでも乗せてもらひつて、海賊に見つからないよう、いつそり船出するしかない。

二人はそう決めると、早めの食事を摂りつい、また部屋を出て行つた。

そして夜。

といつても、まだ宵の口。

セインのもそもそと動く気配に、キヤルが目を覚ます。

「何やつてんの？」

目を擦りながら、声を掛けてみる。

「あ、ごめんキヤル。起こしちゃつた？」

カーテンを少しだけ開けて、明かりも灯さずに窓辺に立つセインに、キヤルは何となく事態を把握する。

「・・・何かあつた？」

「うん、昼間の海賊さんたちがね」

二人とも、声を潜めた。

ちょいちょい、と、セインが外を示す。

キヤルはセインの側に、静かに歩み寄つた。

「うわ、いるわね」

そつと、窓の外を覗いて、キヤルはうんざりしたような声を出す。部屋の向かい側の木の下、宿屋の外壁の隅、その壁に面した細い通路。

見えるだけでも結構な数だ。

「・・・逃げよっか？」

「そうね。宿泊費は机の上にでも置いとけばいいわよね  
早々に話がまとまる、二人とも素早く準備を完了させる。

「キヤル、着替えた？」

「一番に着替えたわよー」

パジャマのままで逃げるわけがない。

顔を真っ赤にしたキヤルだったが、セインは意に介さなかつたらしい。

「じゃあ、行こつか。荷物、離さないでね？」

につこり微笑んで、セインはキャルを、彼女の大きなカバン」と抱え込んだ。

「ちょ、セイン、ここ一階！」

キャルが悲鳴を上げる暇も無く、セインは彼女を抱え込んだまま、音もなく窓から飛び降りた。

「大丈夫？」

「い、いいから、行くわよ」

バクバクする心臓を、キャルはどうにかこうにか押さえる努力をする。

時々セインがとる大胆な行動に、キャルは面食らうことがしばしばある。

普段がふだんだけに、予測がつかなくて困る。

「いつもこんな風ならいいのに」

「え？ 何？」

「何でもない！ 見つからないうちに行くわよー」

二人は宿屋の壁から離れて、目の前の茂み伝いに移動を始めた。カシヤン！

頭上から、何かが割れる小さな音が聞こえた。きっと、海賊どもが、先ほどまで一人がいた 部屋へ侵入したのだろう。

「何気に危機一髪だつたのかしら」

「みたいだね。どうする？ このまま港に出ちゃう？」

「そうね。それがいいわね」

ヒソヒソと話しながら、四つん這いになつて進んでいる時だった。ボキッ！

盛大な音があたりに響き渡った。

ざあっと血の気を引かせて一人が振り向いた先。

セインの足元には、真つ二つに折れ曲がった木の枝が。

「この、大馬鹿者！」

「うわあん、ごめんよおー！」

そうつと辺りをうかがつてみる。

二人に気付いた気配もなく、しんとしたままだ。  
安堵に胸をなでおろす。

「おい、物音が聞こえたが・・・」

急にすぐ横から声をかけられ、一人は飛び跳ねた。  
セインに至つては、声をかけてきた海賊と、バッヂリ目が合つてしまつた。

「いたぞ！」

「わわわっ！」

一日散に駆け出しだが、時は既に遅し。あちらこちらから人影が溢れてくるのが、夜目にも分かる。

「つ、このまま港まで突つ切るわよ！」

## 「難去つて？」

まさか海賊たちだつて、自分たちの船のある港に逃げ込むとは思わないだろ。それに、港町というものは大概入り組んでいる。うまくすれば、どこかで彼らを撒いてしまえるかもしれない。

「港に着いたらどうするの？」

「小さな漁船でもボートでも、とにかく何でもいいわ！ 借りるなり乗せてもらひなり、ついでだから闇夜に紛れてエルグランド島へ向かうわ！」

「わかつた！」

二人は走った。

とにかく走った。

時にはくねくねと曲がる路地を行き、右に曲がり、左に曲がる。気が付けば、海賊たちの怒号も罵声も、聞こえなくなっていた。

「ま、撒いたかな？」

「さあね。分からないわ。でもとにかく、何とか港には着けたみたいね」

せいぜいと、息を整えながら、一人は港にある倉庫街の一角で、身を潜めて、港の様子を窺つた。

ざつと見ただけではすべてを把握しきれないが、昼間に来たときの記憶と照らし合わせれば、だいたいどこに何があるのかは心得ていた。

彼らから見て右の沖合に、巨大な帆船が、黒い水面に、更に黒い影を落としている。

「あれが海賊船よね。よかつた。島とは反対のほうだわ

「エルグランド島つて、あっちの？」

海賊船とは対極に、左側に月の光を浴びて、ほの青く、海に浮かぶ小さな丘のような島が見えた。

「好都合だわ。こちらから回つて、小さなボートか何か、探しまし

「よ

そう言つて、キヤルが倉庫の壁に挟まれた細い路地へ向かつた時  
だつた。

「きやあああああー！」

「キ、キヤル！」

ばさばさと、大きな網の中に捕まつて、キヤルが空中に吊り上げ  
られたのだ。

「何よこれ魚臭い生臭い！」

「・・・キヤル？」

そんな状況でも手足をバタバタさせで、まったく危機感のない様  
子に、セインは眼鏡をずり落とした。

「臭くつてしまねえなあ、お嬢ちゃん。何せ俺らが漁をするときこ  
使う網なもんで」

倉庫の屋根から、男が顔を出した。

「あ、あんた昼間の！」

見覚えのある顔に、キヤルは目を吊り上げた。

間違ひなく、セインに絡んでいた髭面の男だつた。

「お嬢ちゃんくらい頭が回るガキなら、仲間を振り切るくらい、わ  
けがないだろうと思つてね」

男の眼に、昼間は見ることが出来なかつた危険な光が宿る。

「おつと、動くなよ？ お嬢ちゃんが心配なら船まで来るこつたな。  
俺たちの目的はあんただ。眼鏡の兄ちゃん」

手を合わせようとしたセインに、男はそう告げると、怒鳴り続け  
るキヤルを引き上げて軽々と抱き、さつさと屋根の向こうに消えて  
しまつた。

「くそつ」

セインは踵を返し、キヤルが落としたカバンを拾い上げると、海  
賊船へ向けて走り出した。

「・・・ちゅうど。女の子にこの扱いは何よ？」

担がれっぱなしであちこちが痛いのに、やつと降ろされたと思つたら、それでも網にかけられっぱなしで、キヤルは先程から機嫌が悪かつた。

ぐるりと田線をめぐらせれば、窓からはすぐに海が見える。板張りの室内には、いろいろと雑多なものが置かれていた。

何の部屋かといえば、余つたからいらないものを置いている部屋、ところの表現が一番合にそうだ。

「迂闊だわ。私としたことが、あんなへボいオヤジに連れ去られるなんて」

おまけに残してきたセインはいろいろな意味で軟弱で、正直心配だ。

「アレで何百年も生きてこられたんだから、きっと生き残ってボケちゃったのよ」

ぼそりと、セインにハツ当たりしてみる。

初めて彼に出会ったとき、何の変哲もない古びた剣が、ボロボロのまま岩に突き刺さつていて、それを、かわいそうだと思つた。

岩の周りはきらびやかな聖堂の壁で囲われて、聖堂の周りには、かの剣を引き抜かんと、頭の悪そうな豪傑ばかりが集まつて。

剣はボロボロのまま、静かに、ただそこにあつて。

一体どれ程の時を、この岩に刺さつたまま、剣はここにあつたのか。

なぜ封印などされて。

対の筈の鞘もなく、抜き身のまま。

聖堂の外の力自慢どもは、こんなことを考える自分のことなど、きっと笑い飛ばすだけだろう。

ただの少女趣味だと。

子供の戯言と。

そうして誰も、この剣自身のことなど、考えもしないのだ。

かわいそう

そう思つて、何も考えずにただ伸ばした自分の指先が触れた瞬間。  
氣の遠くなるような時間、そこにただ、あつただけの剣が。

今打出されたばかりのような、眩い刀身となつて。

キヤルの手に握られていた。

「それがあんな大ボケだつたなんて」

「誰だい？ その大ボケってのは」

ぬうつと、部屋に入ってきたのは、自分を連れ去つたあの男とは  
別の男だった。

「ノックもしないの？ しつけがなつていねわね」

キヤルは男のつま先から頭のてっぺんまでを、じとりと観察した。  
他の海賊たちが腰に挿している短剣と違い、装飾が少々過剰な長  
剣を下げている。

彫が深くて男らしく精悍で、日と潮に焼かれた肌は浅黒く、健康  
的で若々しくさえある。

どいかの誰かさんは、ずいぶんな違ひだ。

「小さいとはいえ、レディに失礼だつたかな？」

「だったら、この状態をなんとかしてもらえない？」

「これは、申し訳ない」

明らかに、今までのムサイ海賊たちは違う男の様子に、賢い彼  
女の頭は、大体の見当が付いた。

「貴方が船長？」

網を外す手際の良い男の手先を見ながら、キャラルは考え込んだ。  
どこかで見たことがあるような。

「…よく分かつたな。俺がこの船の持ち主だ」

心なしか、男の顔は嬉しそうだ。

「貴方、私の連れが目的だそうだけど」

「ああ。お嬢さんを使つておびき寄せてみよつかと思ってね」「まるで漁でもしているような言い草に、キャラルはムッとする。「無駄よ。私なんか工サにしたつて。こう見えて、会つてまだたつたの三ヶ月よ？肉親ならともかく、赤の他人だもの」

虚勢を張つてみる。

だが、それはあつさりとかわされてしまつた。

「三ヶ月も一緒に赤の他人と旅を？そのほうがよっぽど思つがね」

最後に彼女の髪にからまつていた網をほどいて、男はにやりと笑つた。

「あなたの連れ。聖剣だろ。大賢者・セインローズド？」

キャラルは驚いて、大きな眼を更に見開いた。

「ビンゴだ」

その様子に、男はくつくつと笑つた。

## また一難

「何でそう思うの？」

今までセインに剣を出させても、あんな取り出し方をするものだから、手品師くらいには思われても、彼が聖剣であると気が付いた者などいなかつた。

大賢者・セインロズドが引き抜かれた噂は耳にすれど、彼の正体を見破られることなどなかつたのだ。

「こんな、私みたいな子供が、聖剣を引き抜けるとでも？」

「聖なる剣なんだろう？ だつたら、大人だけが引き抜けるとは限らない」

キヤルは血の気が引いていくのを感じた。

セインがあの聖剣だと知れてしまつたら、大変なことになる。

彼が封印されていた聖堂の周りに集まつていた、頭の悪そうな人たち。

私利私欲に目がくらんだ権力者や、力を欲する馬鹿者どもが、よつてたかつて彼を我が物にしようとするだろつ。

そうなつたらセインはどうなる？

自分は？

キヤルはゾッとした。

「あいつが聖剣？ 变な特技はあるけど、れつきとした人にしか、私には見えないわ。それとも剣が人に化けるとでも？」

「大賢者・セインロズド。どれ程の業物であろうが、单なる剣に賢者の称号が何故与えられたのか。それを考えたら、剣の正体が人間だつて不思議じゃねえ。案外、頭の切れる凄い剣の使い手に、そんな二つの名がついただけなのかもしれないしな」

おどけてそんなことを言つて見せ、次の瞬間にはにやりと笑う。

「それでも・・・世の中結構摩訶不思議なモンなんだぜ？」

今まで見てきた大人たちとは違う。

キヤルの本能が警戒信号を発していた。

だが、男はお構い無しに、キヤルの頭をわしわしと撫でる。

「海賊なんてものやつてゐからな。いろんなモンを見てきたのさ。

おかげで御伽噺までガラにもなく信じてしまえる

「・・・じゃあ、エルグランド島は？ 何か見た？」

キヤルは身を乗り出させた。この男は色々な意味で警戒の必要がありそうだが、御伽噺まで信じられるといつのなら、何か手掛けかりに繋がる情報を持っているかもしれない。

「何だ？あの島に用なのか？」

キヤルの勢いに、男は気圧される。

「そうよ！伝説が残るあの島で、何か見た？！」

「残念だな。俺もここにはあんまり来ないんでな」

「そう・・・」

がつくづくと、キヤルは肩を落とした。

「何だ、傷つくな」

顔を覗きこまれたが、キヤルはフイと、そっぽを向いて見せた。

「別にいいわよ、貴方が傷ついたって私には関係がないもの

「そりゃあ、まあそうだ」

男は冷たいキヤルのその反応に、肩を小さくしてみせた。

「・・・あの島、何があるのか？」

「さあ？ 楽園に続く道だか扉だかがあるっていう伝説があるだけよ

「その割にはご熱心だな？」

「だから何？ 私が何にご執心だろうと、あんたに関係の無いことだ

わ

男との会話に、キヤルは段々腹が立ってきた。

先程から床の上に座りっぱなしで足が冷たくなってきているのも

原因かもしれない。

相手も床に座りっぱなしとはいえ、最初からニヤニヤと、どこか嬉しそうなところがシャクに触る。

今の状況を、楽しんでいるのだ。この男は。

「キャプテン！例のヤツが来ましたぜ！」

またもやノックもなしに、今度は頭の禿げた、初めて見る顔がドアから出てきた。

「レディの前だ。ノックくらいしない」

「あ、はい！すいやせん！」

禿げた男はドアを開けたまま、再び甲板の方へ出て行つた。

「さあ、ナイトのお出ましだ」

そう言つて立ち上がると、いよいよ楽しそうに、男は部屋から出て行つてしまつた。

残されたキヤルは、男の最後の台詞に、先ほどの不機嫌も忘れて、笑い出しそうだった。

「ナイトって、セインのことよね？ナイト？あいつがナイト？似合わなすぎ…」

そんな風に自分が笑われているとは露知らず、セインは海賊船の甲板上で、複数の男たちと対峙していた。

「キヤルを返してくれないか?」

高々に叫ぶと、男たちの間から、ひと際立つ容貌の、背の高い男が現れた。

「あなたがあのお嬢さんの連れかい?」

「・・・貴方は?」

「俺はこの船の持ち主だが?」

睨み付けるセインをものとせず、男は自身の足元、すなわち船を親指で示す。

「そうですか。僕はセイン。キヤルを返してくださいませんか」あくまで少女の安全を確保したいのだ。鋭い視線は用心深く少女の姿を探している。

「俺が気になつていいのはあんただ。あなたの出方次第だな」「出方とは?」

セインは一步半だけ、左足を下げる身を引いた。  
いつでも動けるようにするためだ。

「セインとか言つたな? 尊の聖剣を、俺に引き渡してほしいんだが」「交換条件ですか?」

「そういうことだな」

セインは眼鏡のズレを直す。

きらりと眼光が鋭くなつたのを、男は見逃さなかつた。

「あんただが来てくれなきや、あのお嬢さんはサメの餌にでもするが?」

すつ、と、セインの眼光が、さらに危険なものへと変わる。

「・・・僕を怒らせないほうがいい」

その言葉に、海賊たちは一斉に笑い声をあげた。

眼鏡をかけた、色白で、背は高いが線の細いセインが、自分たちをどうにかできるなどとは思えない。

セインは手の平を向かい合わせ、間に空間を作る。

その小さな隙間から、ずぶずぶと、始めは柄が。次第につばが出現し、最後に刀身が、彼の血と体液を滴らせ、ぬらぬらとした妖光を放ちながら、セインの手に握られた。

ざわめく海賊たちの中で、自称船の持ち主だといつ男だけが、ピュウッと口笛を吹いた。

ぱつと、セインの姿が消えた。

「ぎゃ！」

彼が立っていたすぐ右側から悲鳴が上がる。

キイン！

続いて、先ほど悲鳴を上げた、倒れこむ海賊の前方から、短剣が弾け飛んで、高い金属音を響かせた。

「野郎！」

気付いた一人がセインに切りかかるが、あえなくかわされ、代わりに柄で頭部を殴られて氣絶する。

立て続けに一人がかりで右と上部から切りつけるが、セインは長身をひらりと舞い上がりさせると、剣を軸に体を回転させて一人を蹴り飛ばし、着地ざまにもう一人の短剣を器用に剣先で弾き飛ばして、勢いのまま肘鉄を腹に食らわせた。

次々と倒れ始めた仲間に、海賊たちは殺氣立つた。

「お嬢さんが剣の使い手だとは聞いていたが、まさか剣自身が凄腕だとはね」「だとはね」

楽しそうに、船の持ち主は笑く。

「そこまで！」

響き渡つた一喝に、全員が声の主を振り返った。

「キヤル！ 無事だったんだね？！」

そこにいたのは、小さな手足を踏ん張らせて立っている、ふわふわの金髪の少女だった。

セインは周りの海賊たちを押し退けて駆け寄ると、キヤルをぎゅっと抱きしめた。

ボ力！

「あ痛！」

セインに抱えられたまま、ちょうど彼の頭に手が届くのをいいことに、キヤルは思い切りセインの頭を殴った。

「あたしを一人にするなんて！」

ぽかぽかと、小さな拳で何度も殴られて、セインの眼鏡はどんどんずれしていく。

「ごめんよキヤル、だからこうして来たじゃないか」

「遅いのよ！」

「小船を探すのに手間取っちゃって、甲板によじ登るのも大変だつたんだ」

セインはキヤルの小さな頭や頬を、何度も撫でる。

「もう、本当に来てくれないかもって思つたんだから…」

「ごめん、ごめんつてばキヤル」

ぐしごしひと、涙を溜めて、今にも泣き出しそうな少女を、一生懸命なだめる青年に、海賊たちはあっけに取られた。

「はーははははは！」

大きな、まさに爆笑といった笑い声に、一同は振り返った。

「キヤ、キヤプテン？」

「はーこりゃあまいつた！」

さも面白いと言わんばかりの、自分たちの船長に、海賊たちも戸惑い気味だ。

「気に入った！」

「は？」

男はびしつと二人を指差した。

「キヤルだけ？お嬢さん、エルグラント島に連れて行つてやるつじやないか」

「はー？」

船長の発言に、海賊たちは顎が外れそつた勢いで、ぽかんと口を開けた。

「俺様は海賊王ギャンガルド。ちつたあ、知れた名だが？」

男は自分の胸元と、船上にはためく船旗とを、交互に示した。

キヤルはあわてて男の顔と、旗とを、何度も確かめる。

「あー！」

今度は大声を上げて、キヤルが男を指差した。

旗に描かれるは黄金のマーメイド。

三叉の槍を携え、王冠を手にした、海の女王。

この旗を持ち、大帆船クイーン・フェュエル号を駆る、海賊王の異名を持つキヤプテン・ギャンガルドといえば、泣く子も黙る海賊の中の海賊だ。

しかし、キヤルの口から出た呼び名は違っていた。

「賞金首一千万ゴールド！」

「え？ そうなの？」

海賊といえば大概は国境を関係なく走り回る上に、それなりに海の治安も管理してくれるので、取締りなどの対象にはなれど、賞金首にされてしまふようなことはないのだが。

力を持ちすぎて、各国から迷惑がられて賞金をかけられてしまつた。

ギャンガルドは、そういう唯一の海賊だ。

「キヤロット・ガルム。またの名をゴールデンブラッディローズ。黄金の血薔薇といわれる賞金稼ぎが、まさかこんな子供とはね」  
ギャンガルドはにやりと笑った。

「悪かったわね。みんな絶世の美女とか思つらしけど、こんなお子様でがっかりしたでしょ」

キヤルの肯定に、海賊たちは開いた口を更に開けた。

「ええええ！？ こんなチビがですかい？」

あの、禿げた海賊がキヤルを指差した。

「あなどるなよ？ お嬢さんの剣技をここで披露してもらひつか？ おま

えなんかあつさつ真っ一いつだ

### ゴールデンブラッディローズ。

その名に海賊たちはキヤルとセインから距離をとった。

「さすがね。貴方の部下だけあるわ。ガラは悪くても、頭は回るのね」

セインの剣が届く距離ではないが、懷にはすぐに潜り込める。やんな距離だ。

「さつきも言つたが、俺はお前さんらが氣に入つた。こいつらは氣にするな。癖だ」

さらりとそんなことを言われて、にわかには信じがたい。

「・・・物騒な癖ね。気に入つたって、私が賞金稼ぎである以上、貴方の首を狙うとか、そつは思わない?」

「この船の上でか? 不可能だよ。俺の首を取つて、それから? 海の上でどうする? それに、俺の部下しかいない船上で、できるのかい? 危険なのはあんたたちのほうだと思うがな」

いくら有名な賞金稼ぎと聖剣とはい、この船の屈強な男達を前に、それは不可能だろうと思われた。

「そうなつたら、ここにいる全員蹴倒してでも陸に帰らせてもせりうわ。それくらいの自信はあるわよ?」

海賊王の意に反して、不敵に微笑むキヤルに、ギヤンガルドはまた、面白そうにくつくつと笑つた。

「やっぱり氣に入った! どうだ? 俺の船に乗つておかなか? ここで戦うのもいいが、どうせならタダで島に行つたほうがいいだろ? ?」

その申し出に、キヤルは少し首を傾げて考えた。

その仕草はどう見ても八歳の少女でしかなく、とても賞金稼ぎには見えない。

お金なら、まだあるから、当分は大丈夫。ここで海賊を押しのけ

て小船が何か奪うにしても、場所もよく分からぬ上に、面倒くさい。

しかも小船で行くより大きな船のほうが快適だ。

おまけにあの海賊王の船だ。

見物するのも観光気分で楽しいかもしれない。

「決めた！ ついてく！」

なんとなく、そう返事をするだらうと予測していたセインは、あきらめ氣味の笑顔をつくった。

「キヤル。彼らは僕が目当てだつたって忘れてるでしょ？」

そのセインに、海賊王は答えた。

「喉から手が出るほど欲しいことは変わらないが、さつきのあんたら見てからじや、諦めるよりないな。五百年もの封印が解かれた理由つてのは、是非聞いてみたいがね」

「簡単さ。キヤルが僕を起こした。それだけだよ」

微笑むセインに、ギャンガルドはにやりと笑つた。

「さあ、話はまとまた！ 野郎ども…」の二人は俺たちの客人だ！ 粗相のねえようにしゃがれ！」

「おおうー！」

意氣のいい声が、あちらーこちらから一斉に上がった。

## 月光

それからは大変だった。

一気に盛り上がった船上は、船出の忙しさに風のようで、セインなどは有無を言わさず駆り出され、ロープ張りやら帆布を下ろしたりするのを手伝った。

ひと段落すると、今度は無事に出航できた祝いで、甲板はお祭り騒ぎとなる。

酒樽がいくつも運び出され、コックが腕を振るつた自慢の料理が、テーブルから床の上から、所狭しと並ぶ。

柱と柱の間にはランプが吊り下げられ、巨大なイカ釣り漁船のようだ。

セインもキヤルも、その騒ぎに呆気にとられて、ただぽかんと海賊たちを見ていた。

「・・・凄いわね」

「うん。僕も何度か船には乗ったけど、ここまでお祭り好きなのは始めてかな」

なんとなく隅によつて、並べられた料理をなんとなくつまんでいると、あちこちから、同じ言葉が聞こえてくる。

「グラート！」

「わあ！」

その言葉が真横から発され、セインはびくんと肩を縮めた。

「な、何？」

キヤルはキヤルで、セインにしがみ付いている。

「おりやあ、タカつていうんだ。お嬢ちゃんに挨拶したくてさあよく見れば、酔っ払ったあの禿げ頭だつた。

「主賓がこんなところにいちゃあ駄目じゃねえか。向こうへ来いやそう言って、ぐいぐいと一人を引っ張って、気が付けば甲板の真ん中に連れてこられていた。

そうなると、一人の周りにどんどん人だかりが出来てゆく。

まあ飲め、といつてグラスを手渡され、なみなみと酒を注がれると、禿げ頭のタカが、高々と自分のグラスを持ち上げ、余った左手で、セインのグラスを持った腕を、わっしと掴んで持ち上げて、また言つた。

「グラート！」

すると一斉に、周りの男たちも、グラスを高々と上げた。

「グラート！」

圧倒されてわけが分からぬといつた表情のキヤルに、セインが笑いかける。

「大丈夫？」

「え、ええ。つていうか、グラートつて何？乾杯みたいなんだけど」「うん、乾杯とたいして変わらないかな？古代語なんだけど。感謝するつていう意味なんだ。まさかまだ船乗りの間で使つていいとは思わなかつた。伝統的なものになつていいんだろうね」

「へえ・・・」

何百年も生きているだけに、セインは物知りだ。

余分なマメ知識も多いことは多いが、まだ八年しか生きていない自分には、その長い年月を、想像することさえ難しい。

こんな風に、彼が生きてきた長い時間を思わせる発言をされると、余計にそれが感じられた。

しかしすぐに、あれを食べ、これを飲めと、次々と皿から瓶から差し出され、おかげであまり考える余裕がなくなつた。

「よお、お嬢ちゃん。あん時はすまなかつたなあ」

ぬうつと、一人の前に顔を出した髭面の男の腹に、キヤルはいきなり、有無を言わさず拳をお見舞いした。

「お、おじょう、ちゃん、そりや、ないんじゃ・・・」

腹を押さえて男はうずくまる。

周りの海賊たちは大歓声だ。

「この連中の中で、あんたが一番私にとつて不屈き者だからよ」

港の街中で、先頭を切つてセインに絡んでいたのも、おそれなくセインのことをギャンガルドに報告したのも、そして何より、臭かつた魚の網にキヤルを詰め込んだのも、この男だ。

騒ぎの発端はすべてこの男にあるといつても過言ではないだろう。「すまなかつたよ。俺はラゾワつてんだ。一応この船の風読みを任されてる。よろしくな」

にしし、と笑つて差し出された手を、キヤルはうさん臭そうに見つめた。

「風読みがこんな所に居てもいいの？」

「お、おうー今は順風でな。しばらくは大丈夫だ」

セインが聞くと、出した手を握つてももらえないでいたラゾワは、助かつたとばかりにセインを見上げた。

そこで。

「・・・兄ちゃん、でけえな」

しみじみと、セインの頭のてっぺんを見つめた。

ラゾワも、どちらかというと背が高い部類に入るのだが、それでもやはり、セインのほうが高い。

「いくつぐれえだ？」

ラゾワの質問に、セインは腕を組んで考えてみるが、思い出せないらしい。

「さあ？ もうずいぶん昔に測つたままだから、覚えていないな」  
その長身から、初対面で見た、小さなキヤルに蹴りつけられた姿は、中々に違和感があるかもしれないな」と

「お嬢ちゃんのほうは、こうして見てみると、なかなか別嬪じゃねえか。やつぱり俺の目に狂いはないね！ 将来はそちらの男が振り向かずにはいられないような美人になるだろうな」

「・・・そういうばあ、私たちを売り飛ばすとか言つてたわね」

髪の顎に手を添えて、キヤルの顔をまじまじと観察する男に、キヤルは嫌味臭く、わざと言つた。

「ははは！ ありやあハク付けの嘘さ。人販買なんぞ、うちのキヤ

ブテンが許さねえよ

ようやく口を利いてくれたキャラルに、ラゾワは笑つた。

もともと、悪い男ではないのだ。

ガラが悪いだけで。

「あの時は、何で僕に声をかけたの？僕、金田のものとか、持つて  
いるように見えないとと思うのだけど」

「そういえば、と、思い出したようにセインが尋ねた。

「あ、う、いや、あれはだな、金田のものが欲しいとか、そういう  
んじやなくて」

急に歯切れの悪くなつたラゾワに、セインもキャラルも首を傾げた。  
事情を知つてゐるのだろう、一部の海賊たちは野次を飛ばしたり、  
口笛を吹いたりしてラゾワをからかつている。

「だから、つまり、その

「つまりその？」

「細身の別嬪が歩いてんな」と・・・

「・・・・・・・」

顔を真つ赤にして答えるラゾワに、セインもキャラルも目が点にな  
つた。

「ええ！？それってつまり僕を女の子と勘違いしたってこと？」

「ひくじと、申し訳なさそうに頷くラゾワに、セインは耳まで赤  
くし、海賊たちとキャラルは、堪えきれなくて笑い出す。

呼んでみたら男だつたから、引っ込みが付かなくなつて、とりあえず金をせびつてみたらしく。

「僕つてそんなに女顔かなあ」

「ああ！いやほらー遠目だつたし斜めから見たし！」

落ち込んでゆくセインに、ラゾワがあわてて言い訳をする。

「キャラル、君笑いすぎ

「『ごめ、だつて、くくく、お腹イタ、た、助け、くふふ』  
たしかに線が細くて整つた顔立ちのセインだが、女性に間違えら  
れるとは。

「悪かったよ、あん時は」

「いいですよ、もう。悶着もありましたが、結果的にはキャラも無事でしたし、」「して島に乗せて行ってくださっているわけですか

ら

そう言つて、笑つてくれたセインに、ラゾワは何度も詫びた。

酒盛りもひと段落ついたところで、キャラは船の手すりに寄りかかって、空にぽっかりと浮かぶ月を眺めていた。

「どうしたの？」

自分の着ていた上着を、小さな肩にかけて、セインはキャラのふわふわの金髪を撫でた。

そつと見上げてくる瞳は、吸い込まれそうなほど大きい。

「月」

キャラはそう言つて、海を指差した。

真つ黒な海原に、きらきらと波頭に穏やかな光を映し、月が姿を崩してそこにあつた。

空の月と海の月。

波が船板を優しく叩く音だけが聞こえる。

「きれいだね」

ぱつりと、呟いた。

「そ？」

「うん」

キャラの髪の色みたいだ。

セインはキャラの横顔を見下ろした。

先程自分を見上げた瞳は、今はもう水面に浮かぶ月を映している。少女の小さな手に握られて、封印から覚めたのはほんの数ヶ月前

だといつのに、もう随分長く一緒にいるような気がする。

何百年も生きて来て、何千、何万という人々と出会つては別れているといつのに、この感覚は不思議で仕がない。

五百年前、生きることしか出来ない体で、死のうと自身を封印した。

あの絶望の中で、一度と再び、この口を開く」とはないだひとつと思つていた。

それなのに。

深い眠りの中で聞こえた声は、あまりにも優しくて。

「セインはかわいそだだから、あたしが争いのない国へ連れて行ってあげる」

セインの実情を知つた後、彼女は泣きそりに笑いながら、無邪気に言つた。

「早く見つかるといいわね」

月を見ながら、キヤルが言つた。

「・・・うん。 そうだね」

争いのない国などあるはずもないのだと、セインは承知の上で、キヤルと旅に出た。

貧富の差もなく、飢える事もなく、争いもない。

伝説の楽園、エルドラドを目指して。

幼なすぎる提案は、賢い彼女らしからぬものではあったが、それでもキヤルらしいと言えばキヤルしかつた。

## セインはセイン

「朝にはエルグランド島に到着するらしいよ?」

「そんなにかかるの?すぐ間近に見えるのに、案外遠いのね」  
月光に照らし出された島は、出航してからあまり大きさが変わつ  
ていないうつに思える。

「風が匂いでしまったから。少しかかるそうだよ?ラゾワが言つて  
た」

「船つて、大きくてもやっぱり風がないと駄目なのね」  
キヤルはあくびを噛み殺すと、ぐいっと背伸びをした。

「じゃあ、眠ることにするわ」

田を擦る仕草が、年相応でかわいらしく。

「さつき、部屋を用意してもらつたから、案内するよ。君のカバン  
も置いてあるんだ」

明日になつたら、島へ降りて、何でもいいからキヤルが喜ぶこと  
があればいい。

伝説の島だといつなら、きれいな光景なんかが見られれば。

たとえば今日の月のよつな。

そうして少し、ヒルドラードに近づけるならそれもいい。

セインはそんなことを思いながら、船底へ続く階段を、うつとうつ  
し始めたキヤルを抱えて降りていつた。

「キヤル、島に着いたよ?」

翌朝、キヤルはセインに起こされた。

まだ全然眠り足りなくて、まぶたが痛かつたが、寝ているわけに  
もいかないので無理やり身体を起こした。

「今日はいい天気だよ。と、いつても、お田様も昇りきつていない

から、断言できないけどね」

セインが言つたとおり、甲板に上がつてみると、上り始めた太陽が、水平線から光を散らして空を染めていた。

「……朝焼けなんて、久しぶりに見たわ。たまにはいいものね」目を擦りながら、キヤルは昇り始めたばかりの太陽を見つめた。その太陽とは逆のほうに目を向けると、船を固定させるための碇を投げ込む音や、ガラガラと小船を下ろす 音やらが、あちらこちから聞こえる。

帆は既に置まれていて、頭上に括り付けられていた。  
昨夜あれだけ騒いでおいて、その手際のよさに、キヤルは感心した。

「よお、早いじゃねえか」

「タカ。おはよう。これから仕事?」

声をかけてきた禿げ頭に、セインが気安く返事をした。

「ダンナに手伝つてもらつて、昨夜のうちに下作りはしておいたからな。おかげで楽だつたぜ。お礼に皿いもん食わせてやるから、楽しみにしといてくれよ」

いつの間にやら、セインと打ち解けていたらしい禿げ頭に、キヤルははつとした。

「・・・ちょっとまって」

「何?」

「今の会話からすると、あのタカつていうのが、この船の料理人ってこと?」

キヤルが眉間に皺を作る。

「うん。料理長だつて。昨夜の料理、美味しかつたよね」

嬉しそうに頷くセインに、キヤルは予想していくもやつぱり驚いた。

人は見かけによらないというが、まさにそれだ。

「あの歯抜けの禿げ頭が、料理長……」

ひょろりとして、格好といい体型といい、どう見ても下つ端にし

か見えないタカだ。

そんな男から、昨日の料理が出てきたとは思えない。

見た目もきれいで、内容も凝ったものが多く、手間隙かけて作られていることがわかるうえに、正直に美味しかった。

「朝食も楽しみだね」

ほくほくと、セインはうれしそうだ。

「・・・。ううね。つて、え？『ご飯食べて』いくつもり？」

意外だ、というようなキャラルを、セインは訝しげに見やる。

「だつて、楽しみにしてろつて言つていたんだから、僕らの分も作ってくれていいんだよ？食べなきゃ失礼じゃないか」

「そりゃあ、そうだけど、だつてもう島に着いているのに、時間がもつたといないわ」

「だめ！」

急に、声を荒げたセインに驚いて、彼の顔を見上げた。

珍しく、真剣な面持ちだ。

「な、何よ」

「キャラルは育ち盛りなんだから、『ご飯をきちんと食べなきゃ…』  
ずい、と、顔を近づけて言い聞かされる。

「分かつたわよ、そんなに怒らなくともいいじゃない！」

キャラルは、セインのこんな顔は、あまり見たことがない。

驚きと戸惑いで、つい拗ねてしまつた。

そんな子供っぽい自分が、時々嫌になる。

「・・・『めん』

素直に謝るキャラルの頭を、セインは優しく撫でた。

「僕もきつく言い過ぎた。『ご飯食べたら、船長にお世話をなつたお  
礼をしに行こい!』？」

「うん」

時々、気が早つて今回のように食事を後回しにしてしまうとしたり、やらなきやならないことをせずにいたりすると、口づして怒られている気がする。

あまり無いことなので気が付かなかつたけれど。叱つてくれる人がいるのは、なんだかくすぐつたい気持ちになる。

「俺に挨拶なんざいらねえよ？恥ずかしくなつちまつ」

ぬうつと現れたギャンガルドに、セインは眼差しを冷ややかにした。

「ずっと聞いてましたよね？嫌な人だ」

「え？ そうなの？」

氣付いていなかつたキャラルは、先ほどの自分も見られたのかと、ぼつと顔が赤くなつた。

「さすがだな。いや、すまねえ。やっぱりあんたたち一人は見ていて空きねえなあと思つてな」

すつと、キャラルを下がらせたセインに、ギャンガルドは片手をあげて制止した。

「おいおい、勘違いしないでくれよ。飯を食いに全員を呼びに来たら、あんたらの声がたまたま聞こえただけさ。セインローズはどうに諦めてるぜ？」

「なら、いいんですけど」

まだ目を逸らさうとしないセインに、ギャンガルドは溜め息をついてみせる。

「たとえここでキャラルちゃんとお前さんとを引き離せたとして、そのあと、どう考へてもあんたが俺の言つこととを聞くようには思えんのだがね？」

「それもそうですね。よくお分かりで」

につこうと微笑んで、ようやく自分から視線を外したセインに、ギャンガルドは肌があわ立つのを感じた。

「末恐ろしいよまったく

各国の首領から恐れられ、荒くれ者の海賊たちをまとめ、海原を駆け巡り、海賊王とまで言われる自分が、これほど恐怖を覚えるとは。

「普段の間抜けな眼鏡の兄ちゃんと、どつちが本当のあんたなんだ

い？」

その質問には、セインではなくキャラルが答えた。

「何言つてるの？セインはセインだわ」

「・・・そりや、そうだ」

大賢者・セインローズドをして、ただの人、と言つてしまえるこの少女は、間違いようもなく、封印から彼の剣を引き抜いたのだと、あまりにも簡単なキャラルの答えに、海賊王は納得した。

「おつと、いけねえ。タ力の奴に怒鳴られちまう。さ、飯だ飯！悪いが通りすがりに他の奴らにも飯が出来たつて、教えてやつてくれ」そう言つと、側にあつたロープを器用にするすると、登つていってしまつた。

「食堂つて、どこだつたっけ？」

昨夜は甲板の上で食事を済ませていたので、食堂の場所を知らないことに気がついた。

誰かに聞こうと、きょろきょろしながら歩き始めたときだつた。  
ジャンジャンジャン！

大きなドラの音があたりに響き渡り、次に。

「オラ朝飯だ！朝飯！」

そのドラよりも大きなギャンガルドの声が響き渡つた。

「あたしたちが伝えてあげなくても十分だわね」「呆れかえつたキャラルの声に、セインは笑つた。

## エルグランド島（1）

他の海賊たちと食堂へ向かうと、大皿に料理が盛り付けられて、おいしそうな匂いを漂わせていた。好きなものを自分で小皿にとつて食べることが出来るので、キヤルはそれが面白いと喜んだ。

「おいしい！」

うれしそうに食べるキヤルに、タカに頼んで弁当を包んでもらおうとセインは考えていた。

迷惑かもしれないが、彼なら喜んで作ってくれるだろ？  
そこへタイミングよく、タカ本人が、なにやら大皿を持って現れた。

「どうだい、俺の料理は？」

「すごくおいしい！」

「そりゃうまい、へへへ」

キヤルの様子に、嬉しそうにタカは笑った。

「で、俺からのプレゼントだ」

そう言って、持ってきた大皿を、キヤルの前にドン、と置いた。  
そしておもむろに、伏せていた巨大な蓋を開ける。

「きやあ！」

「おお！」

キヤルは飛び上がるばかりに手を組んで、回りの男たちは驚きの声を上げた。

「タカ、これ・・・」

「スゲエだろ？」

セインはタカとキヤルの嬉しそうな顔に、目の前の白くて大きくて丸い、華やかな食べ物を見た。

まるでウェディングケーキのようだ、とは思ったが、口には出さなかつた。

「作るの、大変だつただろ？」「

「なに、皆に手伝わせたさ」

三段重ねのケーキには、天辺に巨大な、ピンク色のクリームで作られた薔薇が大輪の花を咲かせ、その周りには白いクリームで作られた薔薇やり ボンが飾り付けられ、食べてしまつのがもつたいないほどだ。

「朝からなんだとと思つたけどよ、朝飯食つちまつたら行つちまつんだろ？」

「ほれ、と言つて、包みを一つ、さらば手渡される。

「弁当だ。昼にでも食つてくれよ」

「ここまでしてもううなんて悪いよ」

作つてもらうつもりだった弁当だが、こんなもてなしまでしてもらつた上では申し訳がない。

タカはそんなセインに、パチリとウイーンクをしてみせた。

「へへ、世にも珍しいもの見せてもらつたしな。聖剣に芋の皮剥きまでさせちまつた海賊なんぞ、きっと世界中どこを探したつて俺だけだぜ？」

セインは泣きそうになつた。

人の親切が、こんなに身に染みたのは、いつたい何百年ぶりか。

「・・・ありがとう」

「あんだけよ、照れるじゃねえか」

タカはセインの背中をばしばしと叩いた。

キヤルの名にあやかつた巨大なバラのケーキは、デザートとして振る舞われ、朝だと語つのに瞬く間になくなつた。

楽しくておいしい時間はあつという間に過ぎてしまい、セインとキヤルは、島に行くための小船を下ろしてもらつていた。

「もう少し近づけりやよかつたんだが、後は浅瀬になつてしまつて、船が乗り上げちまうんでな」

「船を用意してくれるだけで十分だわ。第一印象は最悪だつたけど、

みんな意外にいい海賊だつたし「

「いい海賊、ねえ」

ギャンガルドは言われ慣れない言葉に、こめかみがむず痒くなる。

「タ力、ちょっと屈んで?」

「何だい」

キャラルに言われるまま、タ力は彼女の顔の高さに自分のそれが合  
うまで屈んでみせた。

ちゅ。

軽い、柔らかなキスを頬に受けて、タ力は顔から火が出るほど真  
っ赤になつた。

「お、茹蛸一丁あがり」

「キキキ、キャプテン!」

そのやりとりに、ビツと笑いがあふれる。

「お料理とか、いろいろありがと。ケーキ、今まで食べた中で、一  
番おいしかつたわ」

キャラルの笑顔に、タ力は照れ隠しに頭をつむると撫でた。

「今日は一日よく晴れるぜ。けど、明日にやちよいと風向きが変わ  
るかも知れねえから、気をつけてな」

ラゾワが、キャラルに手を差し出した。

「今度またおんなじ事をしたら、すっぱり切つてあげるから、覚悟  
しどきなさい」

微笑みながら、キャラルは今度こそ、差し出された手を握り返した。

「き、気をつけるよ」

逃げ腰のラゾワに、ギャンガルドが追い討ちをかけた。

「もう、男と女を間違えんじゃねえぞ」

「キャプテン……」

再び笑いが起ころ。

もう勘弁してくれといった様子のラゾワに、セインが手を差し出

した。

「君とはいひいろいろあつたけど、ここの人たちに会えたのは君のおかげだから、お礼を言つよ」

「いいんだぜ、セイン。フォローしてくれなくとも、ギャンガルドがまたそう言つので、ラゾワはセインの手を握り返しながら泣きそうになつていていた。

キャラルとセインは、用意してもらつた小さなボートを漕ぎ出すと、何度も振り返つて、クイーン・フューリル号を後にした。

あれだけ大勢と過ごすのは、一人にはとても珍しいことだった。波の音と、海鳥の声しか聞こえなくなると、妙に静かに感じられた。

「楽しかつたね」

「おいしかつたわ。タカだけでも連れて来られたら良かつたのに」

「そんなことしたら、皆が飢え死にしちやうよ」

キャラルはよほどタカの料理が気に入つたらしい。

「淋しい？」

「・・・別に？」

「きつとまた会えるよ」

「・・・そうね」

二人は岸に着くと、ボートを砂浜に上げて、近くの木に満潮になつても流されないよう、ボートのロープをくくつつけた。

「さて、どこから回るつか？」

がさがさと、キャラルがカバンから地図と携帯用の方位磁石を引っ張り出した。

「ええと、この浜辺がここだから、何かありそつなどいひせ、つと・

キャラルが、小さな指で地図をなぞつていぐ。

「あ、ここは？」

セインが、今いる浜辺とは逆の、島の反対側に、小さな岬を見つめた。

「・・・「うーん」

渋るようなキャラの仕草に、セインはもう一度聞いてみる。

「・・・ダメ?」

「いえ、別にいいのだけど、そこ、あんまり行きたくないっていうか・・・」

「どうして?」

「カルド岬。魂の岬。つまり」

「あ、いい! 分かった! 言わなくともいい!」

嫌がるセインに、キャラはやりと人の悪い笑みを浮かべた。

「」名答よ。ここら一帯の亡くなつた人を奉る場所がここ。行ってもいいわよ? 何か手がかりがあるかもね?」

「ええ!? やめだめ! だつてここ、鳥葬にするんでしょ? 絶対に駄目!」

鳥葬とは、亡くなつた人の身体を鳥に食べてもらひ事によつて、鳥に魂を天に運んでもらう葬儀のことである。

死体が隠されもせずに風に晒されて、鳥についばまれて内臓などがぐぢやぐぢやに散らかつてゐるような、言わば新鮮なそれを見てしまえるかもしれない、そんな場所が、その岬なのだ。

「行かないわよ。まあ、遠目から見る程度には行つておきたいけど。あたしだつてそんなどこ、『めんだわ』

キャラの言葉に、セインは心底胸をなで降ろした。

「セインなんて何百年も生きてるんだから、見慣れてそうなのに」「見、見慣れたくないよあんなものーつ、気持ち悪い」

何かを思い出させてしまつたようで、セインは口元を押さえて座り込んでしまつた。

「・・・悪かったわ。そうよね。人の死骸なんて、見慣れてしまつたほうがどうかしてしまつわね」

キャラはセインの背中をさすつてやつた。

セインの具合がよくなつてから、一人はとりあえず島を回つてみるとことにした。

結構思つたよりも大きな島だったが、奉られているだけあって道は整備されていた。このぶんなら、一晩泊まれる小屋くらいはどこかにあるのかもしれない。

「あれ？ キヤル、ちょっと待つて」

セインがギヤルの腕を取つて引き止めた。

「何が聞こえなし?」

ギヤルは耳を澄ましてみるか 鳥の声と 遠くから波の音が聞こえるだけで、別段、足を止めるほど変な音は聞こえなかつた。

「別に？」

「そう? 僕の聞き違いかなあ」

セインがそう語って、ギャルの腕を放したときだった。

「エヌハニハニハニハニハニ！」

卷之三

黒女郎の前に現れるのは、口が悪

いき、鳥といふものか。

「鳥羽ロシクベーバー、ギニア」

鳥居口小川に力の志がこのたゞ生息していなか

地  
面

地面に伏せる」とて一撃目を何とかかわした一人は、第二撃目が来る前に全速力で走り出した。

「鳥葬つて、なるほどね！ロツク鳥はここでは神の代行者というわ

けか！」

「あんなのが神様？」

「この一帯の人々にとつてはそういうこと！」

あんなのに食べてもらひて、天国に行けるとは到底思えないし、

思いたくもなしのたか

「つあ！」

容赦のない爪の攻撃から身をかわして、何とか隠れる場所を探す。

「もうー！セインを引っこ抜いてから口クなことないー！」

「ええ？ ひどいよ今それを言つ？」

「気がつけば、道から外れて森の中を走り回っていた。

「も、森の中だつてのに、どうして飛びかかつて来れるのよ～」

「翼を折りたたんで急降下して来るんだよ。飛び立つときは三本の足で地面を蹴り上げるから、翼を広げなくても簡単に空に舞い上がるんだ」

「そんなんうちくはいいからー セイン、あれー！」

キヤルはセインの持つ、自分のカバンに手を伸ばした。

「ええ？ 駄目だよキヤル、出来ないよ」

「あ、あんたね、この状況でそういうことを言つわけ？」

走り回つて息が上がつてきていた。

追い払えそうにもない上に逃げ場所もないとなると、倒すしかな  
いかと思つたのだが。

「だつて神様の代行者を殺しちゃつたら街の人たちがこわいよ？」

「う

それももつともなので、キヤルは泣きだつくなる。

「もうー…どうしようって言つのよー！」

カバンはセインに持たせているから身は軽いとはいえ、このまま逃げ回るしかないのだろうか。

「きやあああ！」

一きなり横合いから突き飛ばされて、キヤルは自分がロツクなん  
とやうに捕まつたのかと思つてぎゅっと目を閉じた。

## エルグランド島（2）

「キヤル、キヤル」

呼ばれて目を開けると、遠くにあのでかい鳥が見える。

「セイン？」

「驚かせてごめん。大丈夫？」

横からの衝撃はセインが自分を抱えながら飛び込んだためのものであることに気付き、キヤルはほっとした。

「ここは？」

白い、朽ちかけの壁と柱。

丸いドームのような天井。

何かの建物に飛び込んだのは分かったが、外ではまだあの鳥が、しつこく飛び回っていた。

「ここには近づけないみたいだね」

「そうなの？」

「うん。あわてて飛び込んだけど、この中に入つてから、降りて来ないもの」

そう言われてみれば、上空を旋回してはいるものの、それだけで、先ほどまでの急降下もなく、しばらくすると諦めたのか遠くへ飛んでいつてしまつた。

ほつとしてから、カバンから引っ張り出して地図を広げてみると、朽ちた建物は用を成さなくなつて長いのか、紙面にその姿は見当たらなかつた。

「ずいぶん古い建物だものね」

「何に使われていたのかくらい、分からいかしら  
きよろきよろと見回してみる。

自分のちょうど真後ろ、建物の中心に、小さな柱が立つていた。  
柱の上には、ちょこん、と丸い石が鎮座している。

「と、届かない」

「取りたいの？」

「触りたいの」

背伸びをするキャルの両脇に手を入れて、セインが彼女を持ち上げてやる。

「セインって、じついう時便利よね。ムカつくけど」

「なんでそこでムカつくかなあ」

「背の高い人間に知る権利はないわ」

キャルはそつと、石を触つてみる。

「何の石かしら?」

「見たことがないね」

青く輝くそれは、水晶でもなく、サファイアでもなく。  
とりあえず、何の石なのか分からないのでセインに体を降ろして  
もらひ。

「ここにこいつはあるんだから、多分この位置から動かしちゃ駄目  
よね」

「多分ね」

しばらく石と睨めっこしていたが、目の前にあらうが頭の上にあ  
らうが、分からぬものは分からなかつた。

「仕方ないわ。ほかに何かないか探しましょっ」

キャルは考えるのをやめて、また建物の中をきょろきょろと観察  
する。

お世辞にも大きいとはいえないこの建物に、あのロック鳥が近づ  
けないとこいつのなら、必ず何かがあるはずだ。

「あ」

セインが声を上げた。

「どうしてあたしじやなくて、セインが見つけるのかしらね  
ほそりとつぶやいてみたが、仕方がないのでセインの側へ行つて  
みる。

崩れた壁の中に、正三角形のプレートが埋まつていて、セインが  
それを掘り出した所だった。

「読める?」

「何とか。古代文字だね。ええと……」

「じびり付いた埃や壁の屑なんかを丁寧に払いながら、セインが文字を指でなぞってゆく。

「えっと……聖なる道しるべを示すものなり。聖者、この地に降り立つを望む、尊き光が……ええと?」

「それ以外は?」

「分からないな。崩れちゃってる」

「それにしても尊き光つて何よ。わけが分からないわ」

両手を腰に当て、ふん、とキヤルが鼻で息を吐き出した。

「でも聖なる道を示すつてあるよ?」

「その聖なる道つてどこへ続く道なのよ」

「僕に聞かれても」

ボ力

「・・・痛い」

殴られて落としそうになつたプレートを、セインはなんとか持ち直して頭をとする。

キヤルの側ではなるべくしゃがんだりしないようじょり、そう思いながら、もう一度、何か読めないかと、プレートの汚れを拭いてみる。

ぐうううう

キヤルがお腹を押された。

「セイン、お腹すいた」

まだプレート眺めているセインに、キヤルはタ力の包んでくれた弁当を要求した。

「ああ、もうお昼だもんね。走り回つて疲れたしね」

セインはキヤルのカバンの中から包んでもらつた弁当を取り出すと、腰に下げてあつた水筒を取り出した。

余つたスープを、タ力が気を利かせて持たせてくれたものだつた。早速弁当を広げると、冷めているというのに、ふん、と良い香り

が鼻をくすぐつた。

「やつぱりおいしそう！」

中身を覗いて、キャラルは喜んだ。

揚げた肉をタレに漬け込んだものを、野菜と一緒に挟んだサンドイッチに、ロールキャベツ、焼き海老にピリッとしたソースを絡めたものや、魚の肉をぶつ切りにしてカブに詰めてふかしたものなど、豊富な内容に、見ているだけでよだれが出そうだった。

「忙しいのに良くこんなに作ってくれたなあ」

そのどれもが、朝食の皿にはなかつたもので、二人のためだけに作ってくれたものだと容易に知ることが出来た。

一人は夕力を褒め称えて、感謝しながら弁当を食べた。  
どの料理もおいしくて、全部食べてしまつのが惜しいくらいだった。

「さて、どうしよう？」

お腹が膨れたところで、セインはキャラルにプレートを差し出した。

「さつきのプレートじゃない。何かあった？」

「うん、このプレート、対になつてる部分があるらしいんだ。それを探してみようかと思って」

一見、端々が風化して削られているために、三角形に割れて崩れているように見えるが、実際は欠けてもないようだ。なのに、文章除で途中で途切れている。

ならそれは。

「もう一枚あるってこと？・・・そうね。外へ出たところでもまたあの馬鹿鳥に襲われでもしたらまらないから、移動は日が暮れてからにしたいし」

キャラルは考え込んだ。

慣れない土地だ。

島とはいえ、本當なら明るいうちに移動するなら移動してしまいたい。だが、あの鳥が邪魔をするから、どちらにしろ移動は薄暗くなつてからになる。

「でもこの小さな建物には、あの青い丸い石と、このプレートしかないし。・・・わかつたわ。手がかりがありそなうなら、それを探してみるしかないわね」

そう決めると、キヤルはもう一度、プレートがあつた場所を、丹念に調べ始める。

セインも、他に何かないかと、柱や壁を調べ始めた。

数時間が経過して、二人とも程よく衣服が真っ白になつた頃。

「ああ、もうだめ」

キヤルが根を上げると、セインも続いて床に座り込んだ。

「見つからないね」

「・・・建物の外壁にあるのかしら」

「探したよ。けど外はきれいさっぱり壁だつたよ」

「よくあの鳥が来なかつたわね」

「だつて建物から離れなかつたし」

「あ、そう」

内にも外にも、プレートは一枚しか見つからず、出でくるのは何がしかの絵と壁の肩だけだつた。

「数枚の絵から察するに。ここは祭壇だつたようだね」

「でも、肝心の何を奉つていたかが分からんわ」

見つかつた、多分壁画であつたのだろう数枚の絵は、この建物と思われる白い祭壇に、人々が供物をささげている絵であつたり、何かの儀式か、仮面を付けて踊つている絵だつたりで、肝心の神様の絵がなかつた。

「つつかれたー」

小さな空間とはいえ、壁やら天井やら、くまなくチェックするとなると、かなりの労力が必要だつた。気がつけば太陽はもう島の山の中に姿を隠そうとしていた。

「あーあ。とりあえずボートまで戻る？」

「待つて、くたびれちゃつて。ちょっとだけ休みましょ」  
日が傾けば、暗くなるのも早い。

それは知っているが、怪鳥のこともある。もう少し休んでもいい  
ように思えた。

キラ

「あ？」

目端に、何か輝いたかと思った瞬間、まばゆい光に襲われて、二  
人とも皿を庇つた。

## エルグランド島（3）

そろりと田を開けると、夕日が山の頂上に、ちょうど触れたところだった。

「セインー。ちょっとー。」

キヤルがあわててセインを手招く。

何事かと思えば、あの青い石が、今は白く輝いて、その中に、なにか文字が金色に浮き出していた。

「これ、プレートの続きだよー。」

「早く読んでー。」

急かされるままに、セインは読み上げた。

「続けて読むと、こいつだ。聖なる道しるべを示すものなり。聖者、この地に降り立つを望む、尊き光が彼の者の頭上に触れるとき、それは姿を現し、大鳥をもつてこの地の守護とせん。我らに光あれ」セインが読み上げると、ぽうっと石は光だし、一筋の光を引いた。その光はまっすぐに、陸のほうへと伸びている。しばらくすると、ふうっと消えてしまった。

「・・・えつと?」

「これ、単なる石じゃなくて仕掛けがあつたんだね」

複雑に鏡を組んで、山の頂上に太陽が触れるときに文字を浮き上がりせ、山の向こうにある程度太陽が隠れるまで、光を海に向かって放つようになされた、人工のものだったのだ。

「聖なる道しるべっていうのは海の道筋で、聖者っていうのは太陽で、彼の者ってのはあの山で?これをするためにあの馬鹿鳥を飼つてたつてこと?」

「まあ、ロックバードの寿命もあるから、あれは何代田かの鳥だろうけど。町の人たちはこの光とロック鳥のおかげでここを聖域にしてしまったんだろうね。聖域にいる聖なる鳥だから、いつの間にか鳥葬なんて風習が生まれたんだろうし、太古の人々はそんなつもり

もなかつたんだろうけど

「そんなことはどうでもいいのよー。つまるところ、この島の伝説やら何やらって、単なるこの灯台の噂つてこと?」

「・・・やうだらうね」

「うつわ骨折り損のくたびれ儲けだわ!」

キャラは今度こそ、どっかりと座り込んでしまった。

気が抜けるとはこのことだ。

太古の人々は、この島と陸とを結ぶ船の道しるべを必要とした。それで、この石とお堂を作つて一定の時間、光で道しるべを浮き上がりさせた。

多分、潮の流れが関係するのだろう。

昔、ここは界隈は渦を巻くほど流れが速くて危険だったが、大きな地震がやはり昔あつて、それから流れが穏やかになつたと、町の年寄りの日向ぼっこに付き合つたときに聞いたのを、セインは思い出していた。

だから、まあ、絵の中には、人々が供物を捧げているのはきっと太陽そのものにであつて、神を奉るとか、そういうことではないのだ。

「でもキャラ」

「何よ」

「単なる灯台つて言つけど、さつきの光景はきれいだつたじゃない?」

夕暮れの光の中を、金色に輝く一筋の光が貫く様は、幻想的だった。

「まあね。あれを船上から見た人が、天に上る階段を見たとか言ったんでしきうね」

「うん。本当に天に続いてそうだつたもんね」

「・・・まあね」

それに、この丸い石の技術はすばらしいものがある。  
どうやつたらこんなものができるのか。

「これ、高く売れるかしら」

キヤルが物騒なことを言い出した。

「・・・無駄だと思うよ。一見普通の石にしか見えないし、持つて行つたところで、さつきみたいに光るには、角度とか色々計算されて作られているだろうから、この場所でないと無意味だろ?」

「・・・やっぱり?」

キヤルはがっくりと肩を落とした。

最終的にはおいしいものも食べられて楽しかったとはいえ、誘拐されてみたりなんだと、あれだけ苦労してここまで来たのに、見つけたものが单なる凝りに凝つた灯台だったでは、先ほどの景色だけでは物足りないようだった。

「とにかく、一回ボートに帰るつか? それともここで一晩泊まって行く?」

気が付けば辺りはすっかり夕闇が押し迫つてきており、東の空には一番星が瞬いていた。

「ボートに帰つても、屋根なんかないんだから、ちょっととの壁と屋根があるだけこのお堂のほうがマシだわ。ここで寝ましょ?」

とはいいうものの、とりあえず火は焚いておきたい。

「まあ、火事にはならないと思うけど」

ロツクバードも姿を見せなくなつてはいるが、二人はそれでも、建物にすぐ駆け込める距離で薪を集めた。

「足りるかな?」

「大丈夫じゃない? これだけあれば」

お堂の周辺だけでは木の枝は思つたより見つからず、茎の太いススキや萱なんかが混じつてしまつた。

「なんか心もとなないなあ」

火を入れてみれば当然、枝よりも早く燃え尽きてしまう。

「松明用に枝を一本残しておいて、もし足りなくなつたら捨いに行けば?」

「・・・誰が?」

「セインが

「・・・・・」

さりと酷いことを言つキヤルに、セインはそつと眼鏡を押し上げて涙拭いた。

「何よ、あたしは成長期なんだからね？！何百年も前に成長が止まつてうすらぼーくなつたセインより睡眠とらなきやいけないんだからね！」

「こんな時だけ成長期を主張されても」

ぶつくさと言いながら、それでもセインはキヤルのために寝床を用意する。

とはいっても、彼女のカバンに入る程度の膝掛けしか今ではなく、セインは自分の上着を、枯れ草を敷いた床の上に広げてやる。

それをベッドにして、さらにカバンを枕代わりにキヤルが寝息をたて始めるど、大きな手の平を、膝掛けの中に体を押し込めて眠る彼女の体に、そつと置いてやつた。小さな体は、セインの手の平でも十分にお腹を隠してしまえる。

これで少しば、セインの体温で温まってくれるだろう。

「おつと、いけない、いけない」

火が小さくなり始め、セインは薪と萱を炎にくべると、キヤルの提案どおりに、取つておいた松明代わりの枝を手にとつて、新しい薪を探しに行こうと腰を上げた。

ぐらりと、くすんだ白壁に、自分の影が移りこむ。

一つの焰に照らされて、巨大に蠢く口の姿に、苦笑が零れる。

化け物と呼ばれ、自ら数多の命をその手にかけ、全身を血で濡らし。

そうして結局、何が守れたのか。

守られたものなど、あつたのだろうか。

化け物。

大賢者などと。

化け物のほうが自分にはふさわしい。

今となつては遙か昔のこととはいえ、罪は消えることはない。

この蠢く影そのものが、己の本当の姿なかもしれないと、セインは自嘲した。

「ウ・・・ン・・・。セインのばあか

そもそもそと、固い床で寝苦しいのか、キヤルが寝返りを打つた。

「キヤル？」

金の睫毛は伏せられたまま。

あどけない少女は、また心地よい寝息をたて始める。

賞金稼ぎのこの子供は、いつからこんな生活をしていたのか。

食べていくためにやつているだけよ

そんなことを、彼女はいつだつたか口にした。

「僕なんかより、君のほうが大変そうなのに」

小さな身体で両手いっぱいセインを包み込んでくれるこの少女に、

セインは敬意を込めて、額にキスを贈る。

たつた八歳で自立して、大人の賞金首を相手に大立ち回りを繰り広げる彼女の過去を、セインはまだ知らないでいる。

彼女もセインの過去を、すべて知っているわけではない。

それでも、セインは彼女から、たくさんの大切なものをもらつた。

眠つていた五百年。いや、封印する前の出来事全部ひつくるめても、彼女と出会つた三ヶ月の間に、手に入れたものはとても大切で。

セインは、キヤルを起こさないよううに気をつけながら立ち上がった。

「あれ？」

セインの手にした松明は、背の高い彼が立ち上ると、ちょうど中央の、あの丸い石を照らす形となつた。

セインは明かりがキヤルの顔にかかるないように自身の体で影をつくり、さうっと石に近づいてみると、

「？」

どういった作りになつてゐるのか。

石の中には、昼間に見たものとは違つものが映し出されていた。丸い輪の中に、細かな文字が、まるで模様の様にびっしりと書き付けられている。

「これも、古代文字みたいだけど・・・」

どこから読んだものか。セインは文字の羅列を指で追つてゆく。

「――」

「・・・え？」

ガゴン

ゴンゴンゴン

ゴゴン

急に、足元から何か甲高い音がしたかと思えば、その音は徐々に重みを増して大きくなつてゆく。

「んー？何？」

手を擦りながら体を起こしたキヤルに、セインはしまつたといふような顔をして、それからひどく情けない声を出した。

「キヤル～、『めんね？僕またなんか余計なことをしたみたい』『は？』

寝ぼけ半分で、セインに近づきながら、キヤルはぼんやりする頭を振つて、状況を把握しようと室内を見回した。

ガゴンゴンゴン

「へ？」

妙な音に嫌な予感を覚えてみれば。

「きやああああああああ！」

床がすっぽりと消えた。

「あああ、『めんよキヤル』

「い、いいい、いいから何とかしなさいよ！」

落卜しながら出る涙は、やつぱり上へ飛んでいくんだなあと妙な感想を抱きつつ、セインは両手を合わせて剣を取り出すと、壁を蹴つてすぐ隣を落ちるキヤルを捕まえ、そのまま向かい側の壁へ剣を

突き刺す。

ガリガリと壁をいくらか削り、一人の体はなんとか停止した。剣を出す際に手放した松明が、落ちて消えるのを眺めながら、ほつと胸を撫で下ろす。

「何やつてるのよセイン！」

「ご、ごめん」

手足をバタバタさせるキヤルに、セインは彼女の腰を抱える腕に力を込めた。

「キヤル？」

「なによ！」

「あんまり暴れると落っこちちゃうぞうナンデスケド」

キヤルは体を強張らせて大人しくなる。

セインの額に流れる汗は嘘ではないだらうから、暴れて手を離されたらたまらない。

「・・・？」

「どうしたの？」

「セインの顔が見えるわ」

「・・・えっと？」

一瞬自分の顔を見るのが嫌なのかと思つてしまつたが、よく考えれば松明を落としてしまつて灯がないはずの今、そういうえば自分もキヤルの顔が見える。

「これのせいかな？」

顔を上げてみれば、あの丸石が、ふわふわと漂いながら光を放つていた。

「・・・飛んでるわね」

「うん。・・・飛んでるね」

本当に、一體どうにづ作りをしてこるものや。」

「あ、もしかして」

1  
?◀

セイントが急にニーリの体から腰を離してしまった。

ମୁଦ୍ରଣ କାର୍ଯ୍ୟକ୍ରମ ପତ୍ର - ୧

# 落ちる！

卷之三

「大丈夫だよキヤル」

変わらない位置から間の抜けた声

卷之三

恐るおそる振り向けば、セインが剣にぶら下がったまま――して  
いた。

落ちなし？

「うん。これ、多分飛石じゃないかな」

ぶら下がつたまま考えるような素振りを見せるセインに、キヤル

は力一杯けんこーをくれてや

「痛いよキヤル何するの！」

「ううせー、じつは心臓が止まるかと思つたんだからね！」

「おまけに、もしかしてって何よもしかしてって！」

確信もなく手を離したのかこの大ボケ。

そう言われてセインは改めて気付き。

「「」「ごめんなさい」」

小悪くなつた。

とにかく、小さなお堂であつた割にはたいそうな仕掛けがてんこ盛りで、キヤルはやりと笑つた。

「キヤル？」

「ふふふふふ、いい度胸じゃない！このキヤロット・ガルム様をこんな目に合わせて、何にも無いなんていつたらこの島、ただじやあかないわよ！」

「キヤルが壊れた・・・」

「ごいん

「あたしは正常よー」

「や、でも」

殴られた頭をさすりながら、セインは島をただじやおかないとどうするんだらうかと考えてみる。

「このままじやどうしようもないから、とにかく下に降りてみましょ？」

キヤルは自分の手にした飛石を、セインにも差し出す。

セインが石に触ると、彼の体もふわりと浮いた。

剣を引き抜いてしまうと、石は勝手に下降を始め、ゆっくつと二人を導いた。

足に地面が触れた感触に、セインは石から手を離す。

続いて、キヤルも地面へたどり着く。

一人が手を離しても、石はそのまま煌々と辺りを照らし続ける。

「便利だなあ

「そうね」

光が届く範囲を見回してみれば、そこは四角にくり抜かれた人口の建造物である事が分かる。

簡素な壁ではあるが、崩れたそこかしこに、着彩された壁画が残っている。

「上の壁と同じ感じだね」

歩きながら、とりあえず観察してみる。壁のつくりや壁画の絵柄や色合いなどが、先ほどまでいた、白いお堂に酷似していた。

「やっぱり、神さまなんかを奉ったものではないって事?」

「うん。珍しいな、普通、こういった建造物には人々が奉った物が何かしら描かれていたりするものなのだけど」

動物や、それらを狩る人々。

戦争でもあったのか、戦車に乗つて槍を掲げる人。

そうして人々の暮らししぶりや、はたまた草花まで。

聖なる者、などという表現があつたくらいだから、何がしかの信仰があつていいと思ったのだが、そんなものは一切なく、まして、古代にはありがちな、王、もしくはその眷属、なんて表現も一切無い。

「これは・・・どんな文明なんだろう」

神がない。

王がない。

それではどうやって国を統治していたのか。

無宗教で、しかも人民だけで国家を統治していたのだとしたら、それはとても発達した国家といえる。

人というのは弱い生き物だ。

何か縋るものや、責任を押し付けたりできるものがなければ、まとまるのは難しい。

それは太古の昔より、神であつたり国王であつたりと、何がしか己らを支配してくれるものを、自然に生んできた。

それが見当たらないということは、人々がよほど安定した暮らしをしていたということだ。

そしてもうひとつ考えられることがある。

「貧富の差が無い、食べるにも困らない、そういう暮らしよね、こ

れ

「そう、だね。貧富の差が無い、ということは、人々が共同して暮らしていたということで、何でも分け隔てなく分かち合っていたんだろう。理想的といえば理想的だけど」

「戦が起きた」

「何がこの国に起きたのか。

何でも分かち合つて共同生活を送り、平和であつたからこそ、何の邪魔もなく技術力が向上し、あんな複雑な構造をした石まで作り出すことが出来た国家。

「相手の国までは分からぬ」

壁画は途中で削り落ち、傍若無人な犯罪者を消し去つてしまつていた。

「セインでも、聞いたことがないの？」

「・・・僕だつて世界のすべてを知つてゐるわけではないからね。自分の国とそれに関わつた国のことならいくらか分かるけれど」

セインのいつもと違う口調に、キヤルは彼の顔を見ようと顔を上げたが、キヤルの場所からは、彼の長い髪が邪魔をして、その表情はまでは窺うことが出来なかつた。

それでもなんだか、セインが悲しんでいるように見えて。

「セイン？」

不安になつて、彼の名を呼んだ。

「・・・何？」

振り向いてくれた彼の顔も口調も、既にいつものものと変わらぬでいたが。

「・・・ただ、呼んだだけ」

「そう？」

不思議そうな顔をしたまま、手を差し伸べてくれる。その手を、キヤルはぎゅうっと強く握つた。

「怖いの？」

「なー馬鹿言つてんじゃないわよ！あたしを誰だと思つてんの？！」

腕を振り上げて怒るキャラルに、セインはハイハイ、と書いて、思い切り握った手を、優しく握り返してくれる。

「・・・馬鹿」

小さくボソリとつぶやく。

寂しいときは寂しいと、言つてほしいと思つのは、自分が子供だからだろうか。

だつて何を考えているのか分からぬ。

彼の背負っているものが大きいものだということくらいしか、キャラルには分からぬ。

支えになりたいと思っても、自分はあんまり幼いから。せめて悲しみくらいは分かつてあげたい。

「ねえ、キャラル」

「何よ?」

ポツリとセインが、零れるように咳いた。

「僕は聖なる剣だとか、大賢者だとか、どこをどう間違つてそんな大層な贈り名がついたのか知れないけれど、本当は、ただの大罪人でしかないんだ」

そう言つて、歩みを止めないセインに、キャラルは何も言わずに歩いていく。

「ごめんね? いきなり変な事言つて」

「別に・・・。あたしだつて、全部をセインに話したわけではないし」

それで、彼の悲しみを分からうなどと、ずつずつじーのだろうか。「そうね、我儘すぎね、あたし」

「え? 何?」

「ううん、なんでもない」

暫く、一人は黙々と歩いた。

飛石に照らし出された壁画はどれも、古びていながら美しく、飽きることはなかつた。

「ねえ、セイン」

突然、キヤルの足が止まつた。

「どうかした？」

「神さまがいなくて、王様がいなくて、みんなで共同して暮らしてて、貧富の差がなくて・・・」

「？」

「それって、エルドラド？」

真剣な眼差しで、壁画を睨みつけている。

「ああ、似てるよね。けど、違うみたいだよ？」

キヤルの様子に少し笑つて、ひとつ絵を指す。

「何？それ」

「うん、二人の人人がいて、その人たちをもう一人の、つまり第三者が秤で量つているでしょ？」

「うん」

セインの示した壁画には、天秤を持つ仮面を被つた人が描かれ、天秤の左右の皿の上に、それぞれ一人づつ人が乗つていた。手には盾と短剣を握つていて。足元には農作物。

「この人たちは自分の土地を争つっていたから裁判にかけられたみたいだね」

背景に描かれたレリーフが、何を争つっていたかを物語る。

おそらく田畠といった土地を争つていたのだろう。

「仲良く暮らしているようで、争いごとはあつたつていうこと？」

「そういうことだね。やっぱり、何事も、喧嘩しないで平和的に、つていうのは難しいようだね」

ある程度具象化された壁画を睨みつけて、キヤルは盛大に溜め息をついた。

「なーんだ」

酷くがっかりした様子に、セインはまた笑つた。

「でもキヤル、この国がエルドラドだったとしたら、もう滅んでしまっていたことになるから、そんなにがっかりすることはないと思うよ？」

「それはやうだけど、ちょいとは近づけたのかなーって思ったのに  
ふつくりと頬を膨らませる。

「ま、なにか手がかりはあるかもね。」この国の名前はそのままエル  
グランドといつらしこから、エルドラードにあやかつたものかもしれ  
ないし」

国が滅んで、名前が唯一残された島に残つた、といつことだらう  
か。

「それにしても、いつになつたら出口にたどり着くのかしら」

「あ、それ、今僕も思つていたと」

壁画がいくら美しくて見飽きなくとも、わずかに歩き廻くめは疲  
れる。

「空気の流れからいつたら、こいつで合ひつていると思つんだけど」  
清々しい、とまではいかないが、こいついた洞窟にはありがちな  
淀んだ空氣とは違つて、いくらか呼吸がしやすい。

それに、わずかだが頬に触れる風がある。

セインはそれが吹いてくる方へ向かつて歩いて来たのだが、先ほ  
どから一向に出口が見える気配が無い。

「まさか閉じ込められたなんて事はないわよね？」

「・・・はは」

ここが地下である限り、出口が崩落している、なんてこともあります  
得るので、その可能性も無きにしもあらずなのだが、それを口にして  
たら間違いなくキャラに一発お見舞いされるので、セインは笑つて  
ごまかした。

「ま、まあ大丈夫だよ、さつと」

「なんでそう言い切れるのよ」

「えー? だつてこの遺跡、多分お墓とかとは違つだろ? し、お宝な  
んかをしまつておいているつていう雰囲気でもないし、だつたら侵  
入者を閉じ込める必要が無いわけでしょ?」

何に使われていたのかまでは分からないが、多分共同の施設か何  
かだつたのだろう。怒られないように慌てて説明する。

「で、でね？僕さつきからイヤーな予感がするんだけど……」「何？」

「……」の方角つて、あの岬の方だよね？」

「……」

一人の足がぴたりと止まる。

「えつとー？」

キヤルが、カバンからがさがさと地図を引っ張り出す。 いまだにランタンよろしく辺りを照らす飛石に、ここここ、と手招きして呼び寄せる。

「これ、便利よね」

「飛石はいろいろ反応するよ？まあ、ここまで精密で凝ったものは、ぼくも見たことが無いけどね」

何故か呆れ顔のキヤルに、気付いているのかいないのか。

セインは普通に説明するのだが、こんな石が「ロロロロ」というたらしい大昔とは一体なんなのか。

とりあえずは、それをさらっと無視して、方位磁石で位置確認をしてみる。

「白いお堂があつたのってこの辺よね」

島の中央部分を示す。

「そう。マル付けておいたし」

「で、今の位置は、多分だけど大体ここ」

地下に潜っているので、地軸に狂いが無ければの話なのだが、小さな指が指示したのは、島の中心から沖合に向けて南東方面。

「…………確実に近づいてるね」

その先には、例の魂の岬。

「カルド岬のまん前に出るのだけはごめんこうもりたいわね

二人とも顔を見合させて額き合ひ。

「でも、空気の流れからいつたら、出口はこの先なんだよ」

「別のルートも、引き返す道しかなさうだし」

そうなると、また延々歩いて、しかも落ちてきたあの縦穴を登る

しかない。

「・・・せつまいるいろいろ反応するつて言つてたけど、この口笛もつ一度浮かべないの?」

「あー、浮力はあるけど、重力に逆らつて人を上昇させるのは無理だろうなあ」

「なんだ。役に立たないじゃない」

「や、すみませんです・・・」

キロリと睨まれて頭を下げるセインだが、キャラルが引き返す気が無いのも分かつていた。

その氣があるのなら、飛石の事が分かつた時点で、最初からそのまま豎穴を昇ると言い張つていたはずだ。

「そうね。なら決心も付くつてモノよ。ただの凝つた灯台ではなかつたつてことは、やっぱり何かあるんだわ」

確実にその顔は嬉々としていて、青い空色の瞳は、またに輝かんばかりだ。

「とにかくここを出ましょ。それからもう一度探索して、この壁画の意味を調べるのよ。なんなら港に戻つて、こここの研究してる人がいないか探したつていいいわ」

「そんな人はいないと思うよ?」

意気込み始めたキャラルに、釘を刺す。

「何でそんなことが分かるのよ?」

「だつて床に積もつた埃」

セインに言われて下を向くと、砂埃で床一面真っ白だった。

振り返つてみれば、自分達二人の足跡が一つ並んでいるだけで、何か落ちていたりするわけでも何もない。

「ね? 研究したりしている人がいれば、足跡くらい残つているはずだよ?」

「じゃあ、私達で調べるしかないわ!」

「そうだねえ」

やる気満々のキャラルに対して、セインはだんだん元気がなくなつ

ていぐ。  
「ごいん

「あイタ！」

左の脛を抱えて、セインが飛び上がった。

「キヤル～？」

「涙眼で抗議したって聞かないわ！なんだつてそんなにあんたつてばヤル気がないわけ？」

うずくまるセインを、キヤルは両腰に手を当けて見下す。結局両脛を蹴られ、セインは眼鏡をずらして涙をぬぐう。正直本気で痛い。

「うひ、やる気がないんじゃなくて、カルド岬に行くのが嫌なだけだよ」

奉られたばかりで新鮮な死体だつたり、すでに白骨化しててしまつていればまだいい。

もし、白骨化しかけ、なんて状態だつたりしたらそれはもう。「あたしだつて嫌だわよ・・・」

キヤルの目が泳ぐ。

「我慢するけど、でもやつぱり気が滅入つちやうじやないか」

セインの目も泳ぐ。

「・・・・・」

「ま、まあ、近づいてきたら匂いで分かる・・・かな？」

「セイン、それって・・・」

「言わないでよ、僕だつて嫌なんだから」

二人とも、ちょっと胸の辺りを押さえる同じポーズでしゃがみこんだ。

「き、気持ち悪くなるから」の話題はとつあえずやめましょひ

「そだね・・・」

お互の顔に青筋が入つていいよつて見えるのさかつと仮のせこではないだろう。

「とにかく、やつせと抜け出すわよ！」

気合を入れるようくに拳を握って立ち上がるキャルにつられて、セインも何とか立ち上がった。

何となく先程より足取りが重い感があれど、壁画をチェックしながら進んでゆく。

「……何にもないっていうのも困ったものだね」

「……そうね」

暫く歩いてみたが壁画があるだけでこれといって何もない。相変わらず何のために作られた建造物なのは至って不明のまま。

「あれ？」

いいかげん一人とも疲れ始めていたところだった。扉がぽつんと出現した。

狭い通路の中に、木製の扉が浮かび出たのだ。

「壊れかけるね」

扉は傾いて、壁との間に隙間が出来ている。

「開けられる？」「

キヤルが言つよつ早く、セインは扉の隙間に手をかけていた。

「せえの！」

力いっぱい引っぱってみる。

「ばき！」

「うわあ！」

思つていたより朽ちていたのか、扉がすっぽり取れてしまった。

「あ、セイン壊した」

「だだだだつて！」

握つたドアノブに張り付いた扉」と、尻餅をついてしまつた。

ドアの残骸の木枠から向こうを覗いてみると、今までの延々続いた通路とは打つて変わって、広いホールのようになつていた。天井は半球状になつており、教会の聖堂を思わせる。

「ああー！」

「へ？」

扉があつた向い側のその空間から、何だか聞き慣れた声がした。

## 真実の御伽噺

「お嬢ちゃん!」「

「ラゾワ!」

「こちらを思いつきり指差しているのはあの鬚面の。」

「何でここに!?」

「いやあ

えへへ、と笑う顔が、ラゾワの持つランタンに照らし出される。

「実はうちちらもこの島に用があつてね」

「ほんとに?」

「セインを追つて来たわけじゃなくて?」

後頭部をこりこりと搔くラゾワに、一人はじつとうと半目で睨みを利かせる。

「な、何だよ、本当だつて!俺たちが探してんのは青くつて丸い・・・  
・・・」

セインとキヤルの眼光に怖じ気づいて、数歩下がったラゾワだったが、急に目が一点に釘付けになつた。

「あ――――――!」

いきなりの怒鳴り声に、キヤルとセインは耳を塞いだ。

「な、何よ!」

「そそそそそそ、それ!――!――!

「は?」

ラゾワの指がこちらへ向けて、びしりつーと突き出される。

「あたし達が何したつていうのよ?!」

「お嬢ちゃんたちじゃなくつて!」

よく見れば、自分達より少々斜め上方に、ラゾワの指は伸びている。

「ああ、これ?」

キヤルが飛石を手に捕まると、ラゾワはもう大騒ぎになつた。

「お嬢ちゃん、これどこで見つけた！？」

「なあに？あんたたちの探しモノってこれだったの？」「ラゾワは大きくなづく。

「港でキャプテンが面白い話を聞きつけたって言つて、皆で探せつて事になつたんだよ」

話すにつれ手振りが加わり。

「それがなんだかメチャクチャ珍しい代物だつて言つじゃねえか。はるか昔の伝説の石だとか、青く輝く水晶だとか色々言われはあるみてえだけどよ」

身振りが加わる。

なんだか見ているほうが疲れる。

「浮き石って、今は言つの？」

「ふかふか浮いてつから浮き石ってんだひ？」

「いや、僕らの頃には、飛石って呼んでいたんだけど

「どつこしたつて同じじやない」

「・・・・・え？」

キヤルが、話が長くなりそうだと、しゃがみこもつとした時だつた。

ラゾワが一瞬、眉間に皺を寄せて考え込む。

「セイン、あんた今、何つった？」

「？・・・僕らの頃には？」

「その次だよ！」

「飛石？」

「つて呼んでただ？」

ずいっと、ラゾワに胸倉を掴まれる。

妙に凄む彼に、セインは何か悪いことでも言つたかと思ったが、石の呼び名を言つただけで、胸倉を掴まれて凄まれてしまつような事をした記憶はない。

「う、うん。そう呼んでいたつていうだけで。ねえ、僕何か悪いこと言つた？」

「セイーだー！」

「うわあー！」

胸倉を掴まれたまま、今度は思いつきり眼前に指まで指されて、とつとう両腕を上げて降参のポーズをとった。

「うがー！」

奇声を上げたラゾワが、急に脛を抱え込む。

「ちょっとラゾワ。セインが何かしたかしら？」

「キャル」

「お、お嬢ちゃん・・・」

涙眼のラゾワを見下すキャルの瞳は冷たくて、抵抗するのも恐ろしい。

「いや、セインの旦那が浮石のことを、飛石って呼んでいたって言つんなら、昔はそれなりにたくさんあつたって事になんだろ？」

涙眼でラゾワが弁解をするが、キャルは片眉をぴくりと跳ね上げただけで、その氷のような視線は変わらない。

正直、怖い。

「だ、だから、たくさんあるんなら、もつと探して見つけ出せば面白いことになるんじやねえか・・・と」

「ああ、そういうことか。確かに僕がまだ剣になる前は、たくさん見かけたね」

ぽん、と手を打つセインの顔を、今度はキャルとラゾワが、二人でまじまじと見つめた。

「な、何？」

「セインが剣になる前って・・・」

「そりゃ旦那、どうこうひつた？」

「あー・・・」

セインは口が滑つたとでもいうように、口元を押された。

「うーんど、ここだけの話にしてくれるかな？」

「・・・セイン？」

不安そうに、大きな瞳を歪めるキャルに、セインは笑つてみせる。

「そうだね、君にはもっと、早く話しておるべきだったのにね」  
その声に、キヤルは急に、セインの話を聞いてはいけないような気がした。

「無理に言わなくつてもいいのよ? ここには部外者も約一万名いる」とだし」

何も今説明することではない。後で落ち着いたときでも良かつた。  
二人の秘密にしておきたい話になりそうだと、キヤルは思つ。

「あ。お嬢ちゃん俺を仲間外れにしようとしてる」

「最初つからあんたは仲間外れよ」

そう、今ここにいるラゾワから、セインの秘密に関わる事柄が外に漏れでもしたら。

ギャンガルドに囚われたときに引き出してしまった、あの恐ろしい想像が脳裏を過ぎつた。

もし、もしセインが、キヤルの手の届かないところへ行つてしまつたら。

知らず、手が震えだす。

「大丈夫だよ、そんなにたいしたことじやない。・・・キヤル?」

そつと、セインがその大きな手で、震える手を包み込んでくれる。

「なんだか知らんが、俺が聞いたらヤバイ話か?」

キヤルの震えを見て、ラゾワは心配になつたのか、一人をおずおずと見やる。

「んー、君は前科があるからね」

「セインの事をギャンガルドにちくつたのは昨日の話よね?」

セインはにつこりと、キヤルは無表情に。

しかし声音にはちくちくと、見えない棘が生えていた。

「だ、だつてあれはよつ、別にセインの旦那があの大賢者セインロズドだつて分かつて報告したわけじゃなくつてよう・・・」

逃げ腰に語尾が段々しどろもどろになつて、最後に至つては聞き取れないくらいに小さい。

「分かつてやつていたことだつたら、ラゾワつていう人間は、とう

に海の藻屑だつたわね」

嘘ではないと告げる眼に、ラゾワは冷や汗が背中を伝い落ちるのを感じ、「ぐくりと睡を飲み込んだ。

「キヤル、そこまでにしてあげなよ。ラゾワが困つてゐるセインの助け舟に、ラゾワは首が千切れんばかりに何度も頷いた。「それに、知られてもたいしたことじゃないから。僕が今まで言い辛かつただけで」

「・・・そう?」

「うん」

セインの説得に、キヤルは小首を傾げてちょっとと考え込むと、ふうつ、と息を吐いた。

「なら、いいわ。話、してくれる?」

「うん。どこから話そうか。そうだな。昔、この国が興るよりも更に昔に、一人の愚かな騎士がいたんだ」

セインの話はおよそ八百年の歳月をさかのぼった。

八百年といえば現在のこの国の元になる国が、醜い争い事を繰り返していた頃の話だ。

途方もない昔話である。

「この国はひとつに統合される前、二つの国に分かれていたのは知つているよね?」

ひとつのかくて豊かな国と、ひとつのかくて力のある国があつた。

回りの国々から身を守るために、小さな国は自然を利用して、国そのものを巨大な要塞にしていた。

北には剣峰ロックガンド山脈。

東に大河グリースブルー。

南にダレス大湿原。

西にグレイトガウン樹海。

これらはなかなかに攻略し難い上に、豊かな自然は豊かな富をもたらした。

大きな国はこれを嫉み、小さな国を力任せに滅ぼしてしまおうと  
考えたが、浅はかな考えは身を滅ぼすに至り、小さな国にしてしまった  
しを喰らつて逆に滅びた。

「そんな話だつたわね」

「へえ？俺は始めて知つたな」

この国の住人ではないラゾワは、たいして興味がなさそうではあ  
つたが、戦いの話となると耳をそばだてた。

その様子に苦笑しながら、セインは更に話を進める。

当時、小さな国には一介の、それこそ目立たないような、平凡な  
騎士がいた。

戦で武功をたて、落ちぶれた家を復興させるのが望みの、どこに  
でもいるような小さな存在だった彼は、やがて戦場で、稀に見る才  
能を開花させる。

数で負ければ地の利を活かし、兵器の性能で負ければ奇襲を仕掛け、  
助けが必要となれば隣国に自ら出向き、どんな不利な状況でも  
必ず論破して救援を連れてくる。

そうして軍師としてほとんどの戦を勝利へと導いた。

それだけではない。

前線には先陣切つて先鋒を勤め、武芸にも秀で、そんな彼を兵達  
は慕い、自ずと彼に付き従うようになった。

そんな彼を、人々は英雄と呼ぶようになった。

「へえ、そんなすげえヤツがいたんだ。うちのキャプテンと、どつ  
ちがすげえかな」

「でも、今の時代には必要がない才能ね」

二人の感想に、セインは小さく笑う。

「でも、そんな彼も誤算があつたんだ」「  
そんな男が、たつた一度だけ、恋をした。

相手は母国的第一王女。

かたや英雄といわれど、落ちぶれた貴族の息子。

かたや小さいとはいえ一国の王女。

周りが、許すはずもない身分差だった。

騎士は戦った。

王女との仲を国王に認めてもらうために、必死になつて戦った。王女は自分のために、戦場へ自ら赴く騎士の身を案じ、王に泣きながら許しを請うた。

だが、それでも二人の仲は認められることはなかつた。

やがて大きな国は騎士の活躍に倒れ、小さな国は大国となつた。そして一人の仲は国民に知られることとなり、国民は一人の婚姻を望む。

国王は恐れた。

騎士の才能と、国民の騎士への支持の高さに恐れ戦いた。

何せ、既にこのときには、数々の戦を勝利へと導いた騎士の豊富な知識とすば抜けた発想力から、彼は英雄以上の英雄という意味を込めて、別の呼び名が付けられていたからだ。どんな窮地にあっても、彼がいれば必ず勝利し、生きて帰れる。

自然に、兵士や国民の間で、彼の存在そのものが勝利への象徴となつていた。

一介の騎士が、国王よりも国民の支持を得るなど、あつてはならないことだった。

「ケチな王様ね。結婚くらい許してあげればいいのに

「そろは行かなかつたんだよ。王女は國の第一王女で、王様には男の子供がいなかつたんだ」

「つてえことは、あれか？王女と結婚したヤツが国の王様になるつてえことか」

ラゾワが顎に手を当てて考え込む。

騎士と王女が結婚でもしたら、国の英雄が王になるのだから、国民は大いに喜ぶのだろうが・・・。

「そう。だから王様にしてみれば、今まで隣国に小さな国と馬鹿にされてきた分、大国の身分のある、できれば王族と王女を結婚させたかったんだ。そうすれば、強力な後ろ盾が出来る上に、成り上がりと馬鹿にされることもないだろ？」

「女だからって王位継承権が無いのが悪いのよ。さすが昔の話ね」  
キヤルがムッとして言い放つが、八百年経つた現在でも、女性に王位継承権や国の首領になる権利の無い国が多い。

「まあね。それに、やっぱり騎士は騎士。どんなに武功を立てようが、王は彼の望みであつたお家の復興を許さなかつたんだ。そんなことをしたら、彼はますます力をつけただろうし、国民の心は王から離れていつただろうからね」

そして王は、騎士を貶める上手い手を考えた。

「負けた国人の人々を、奴隸として扱つたんだ」

セインの眉根が寄せられる。

言葉を紡ぐことさえ苦しそうだった。

「それは酷い扱いだつたよ」

石切り場や鉱山など、労働条件の厳しい場所へ送り込み、食べるのももろくに与えず、動けなくなるまで働かせた。

そしてそれを、騎士の提案として議題を通つたこととして、工作をしたのだ。

国民は怒り、王女は嘆き悲しみ、奴隸とされた人々は騎士を心底から怨みあげた。

騎士は失脚した。

「何それ？皆今まで騎士を英雄と祭り上げておいて、誰もかれも彼を信じなかつたっていうの？！」

キャルが叫んだ。

なんと単純なのか。それも、王の策略だというのに。

「そうだね、信じられないという人もいくらかはいたかもしぬないけれど、ほんどの人が、彼を罵倒したよ。親友でさえね、人々は英雄が図に乗つたと思い込んだ。

ちやほやされて、何でもできると思い込んでいるに違いないと、彼を罵った。

それでも、彼は奴隸達を救おうと、色々と手を尽くしたが、もともと、彼が奴隸を作つたのだと、今更だと、協力してくれる人物さえいなかつた。

それは、王が先に手を回していたからなのだが、彼はそれでも王を糾弾することはなかつた。

まさか王が仕組んだことだとは、夢にも思つていなかつたからだ。王は、自分達の結婚を、いつかは許してくれると信じていたからだ。

しかし、望みが叶うこととはなかつた。

騎士はやがて、国を出ることを決意する。

愛した人さえ自分を信用しなくなつた。

守ってきた国民さえ、今や彼を英雄とも、騎士とも呼ばなくなつた。

彼は深い悲しみに囚われた。

「文字通り、失望したのさ。自分と親しくしてきた者たちも、彼を愛してくれた人も、血を分けあつた肉親さえ、誰一人、自分を信じてくれる人がいなかつたんだ。必要とされなくなつたのだから、國を出ようと思うのも、当然といえれば当然のことだろ?」  
だが、王がそれを許さなかつた。  
惜しくなつたのだ。

騎士の類稀なる才能が。

奴隸制度は王の手によつて見直され、奴隸達は解放される。  
騎士は奴隸という人種差別を強いた罪に問われ、幽閉されること

となつた。

塔に閉じ込められ、王に智恵を貸すことを強要された彼は、頑なにそれを拒んだ。

やがて彼は狂氣の中で、ひとつのことを探み始める。

一振りの剣になりたい。

そうしたら、誰にも支配されず、強要されることなく、人を信じることもなく、ただその刃に光を映しこんで、そこにあればいいのだ。

「剣の使い手だった騎士らしい考えだつた。そうして、牢には一振りの剣が残された」

セインが話し終わると、ホールの中は静まり返つた。

長い沈黙。

何かにすがるかのよう、よつやく、キヤルが震える唇をこじ開ける。

「セイン、その、騎士って……」

ひつそりと、セインは笑つて応えた。

「騎士に、人々が与えた称号は、奇跡の大賢者、だったよ」

「彼がどうやって剣にその身を変えたのかは分からないと」「う。ただ、飽くことなくそう願つていたのだと、そう言つてまた笑つた。

「んな事が、あるのか？」

ラゾワも、顔が青ざめていた。

「僕が手を合わせると、その間の空間から剣が出てくるのは見ていいよね。あれだって、普通じゃ考えられないだろ？」

ここにギャンガルドがいたら、どうこう反応を示すだらうか。

「えっと、信じられないような顔をして、そういうと納得するのよ」

「ああ、キヤブテンならそうだろうな」

御伽噺さえ信じると言つギャンガルド。

それを言ひながら、田の前に立つてゐるじゃないか。剣になつたが、御伽噺だった。

「だつてあんた、こいつて立つてゐるじゃないか。剣になつたつて……」

「ああ、それはこの姿のほうが都合がいいからね。本体は剣なんだ。しいて言えばこの体は鞘なんだよ」

「物騒なことだな

「まあね

セインにしてみれば当たり前のことなのだろう、さうとした彼の態度に、ラゾワは背筋が寒くなつたような気がした。

「ああ、これで少しは重荷が取れた気がするよ

「あたしは余計に重くなつたわよ」

肩を押されてコキコキと首を鳴らすセインに、キヤルは恨めしそうに上目使いでねめつけた。

「・・・ごめん

「いいわよ。しゃべつてくれないことの方が辛いもの

ふいふと、そっぽを向かれて、セインはやれやれと頭を搔く。

「とにかく、その頃にはこんな感じの飛石がよくあつたんだ。これのおかげで、夜はガスを使わなくとも明るかつたし、戦場でも色々と役立つたよ」

「へえ、こんなのが『じんじん』と『いらっしゃへん』にねえ

ラゾワの興味はすぐに飛石に移つたらしく。感心そうに青く光る石を見つめる。

「『じんじん』と、まではいかないかな。これは一応精密に出来た機械だからね。とても高価なもので、持てるのはお金のある人たちだけだつたんだよ」

飛石をいくつ持つてゐるかを競うのは、貴族達のステータスにも

なつていたらしー。

セインは戦のためにそれを借り受けたが、苦労した程だと笑つた。

「あれ？ てえと、あんたそのまま封印されてたってことか？」

思いついたように『アラゾワ』の、興味の移り変わりの速さに、セインはまた苦笑した。

「いや？ 僕が封印するのはまた後の話。それに、封印されたんじゃなくて、封印した、んだけどね」

「されたんでなく、した？ そりやビリビリした？」

「えーっと？」

セインはちよつと考へ込むよつな仕草をして、もつたいぶらせてから、につこりと微笑んだ。

「それは秘密です」

「ああ？！」

がつくつと肩を落とす『アラゾワ』に、セインは楽しそうに言つて。

「だつて、この話まで君にしてしまつたら、キヤルと共通の秘密がなくなつちゃうもの」

「・・・乙女が、おめえは」

「どうとでも？」

にこにこと嬉しそうなセインに対して、キヤルは耳まで真っ赤だ。

「あれ？ キヤル？」

心配そうに覗き込むセインの額を、キヤルはグウで殴り飛ばした。

『じいんいんいんんん・・・

奇妙な音が、地下のホール内に反響した。

## 思わぬ獣道

「いつたあああああい！」

「恥ずかしいことをさらりと言つんぢやないわよあんたつて人は！」

「つ、だつてほんとのことなの！」

「…………」

耳までか全身真っ赤になつたキャルを見て、ラゾワは溜め息をついた。

「やべえ。天然だわ。こつや」「

天然のスケコマシ。

八歳の幼児までも引っ掛けてしまう恐ろしさだ。

「と、とにかく、ラゾワがここにこるつてことは、どこからか入つてきたつて事よね？！」

セインをげしげしと足蹴にしながら、キャルがラゾワに振り返つたので、急にそれた話題にラゾワはあわてて答えた。

「あ？ああ、この先の・・・・」

そのまま自分の真後ろを振り返つたラゾワだつたが、指そつとした指もそのまま、きょろきょろしたかと思えば沈黙してしまつた。

「・・・なんなのよ？」

キャルはそこでようやく、ホールの中を見渡した。

「ねえ、ラゾワ」「

「はい？」

「扉が三つあるわね

「へえ、そうですねえ」

「・・・・・・」

今度はキャルまで沈黙してしまつた。

「え？ちょっと待つてよそれじゃあラゾワ、君つてもしかして二人の様子に事態を察したセインが、早口でまくし立てた。

「えへへへ、そのとおりで」

がいん！！！

脛を抱えて飛び上がったラゾワを、キヤルは無視してセインに向  
き直つた。

「迷子になつたわ」

「・・・ははは」

三つ扉があるうちの一つは、セインたちの背面に。

もう一つは、右側と左側に。

ちょうど丸いホールを三等分する位置に、それぞれの扉があるら  
しかつた。

「どつちから自分が出てきたか分からないなんて、すでにボケてん  
じゃないの？」

「人を蹴りつけておいて、そりやないよ、お嬢ちゃん」

脛を撫でているラゾワの涙眼はそのままだ。

「とにかく、ここにいても仕方がないんだから、どつちの扉か選ば  
ないと」

今まで微かな風の気配をたどつてきていたが、このホールの中では半球形をしているためか、空氣そのものが円を描くように循環してしまつていて、流れの本元を辿れそうにない。

扉も、セインが壊してしまつたもの同様、残りの一枚も木で出来た、平凡な、特にこれといって特徴のないものだつた。

「壁はあれこれ装飾してあるのに扉はシンプルつてどうこいつ」とよ  
？」

「とりあえず両方開けてみたらいいんじゃねえか？」

ラゾワの提案に、キヤルはむうつと頬を膨らませた。

「じゃあラゾワ開けてよ」

「えええ～？」

開けて何かが飛び出したらどうするのか。

「あ、それはちょっと待つて？」

ホールの中央まで出ていたセインが、天井を見上げながらキヤル  
とラゾワを引き止めた。

セインは飛石を天井付近まで飛ばして、首を傾げながら何か考え込んでいるようだつた。

「どうかしたの？」

側へ駆けつけるキヤルに視線を下ろし、セインは困ったような表情を浮かべた。

「ちょっとね、ここ、競技場だったみたいだから」

彼が指示する天井絵を見上げれば、何か巨大な獣と盾と剣を持つ人間が闘いを繰り広げていたり、何がしかの武器を携えた人間同士が威嚇しあつてたりと、結構物騒な図柄が描かれていた。

そうしてよくよく周囲を見渡せば、周囲には低い壁がぐるりと張られ、その奥は一見階段に見えるが、おそらくは観客が座るベンチなのだろう。

「競技場？・・・闘技場？」

「競技場かと思つたなんだけビ、これはどうやら・・・闘技場、らしいね」

扉にばかり気を取られていたせいもあって、境目もなく張られた壁に気がつかなかつた。

「でもよ、大昔の話だろ？もし猛獸が居たとしたつて、とつくにつ死んでんじやねえか？」

まさかといった体のラゾワだが、では、彼らギャンガルド一派は、あの怪鳥には出くわしていない、ということか。

現在地上に残つてゐる連中は定かではないが。

「セイン、カバンは持つてるわね？」

「うん。大事なものだからね」

セインは両手を合わせて彼の本体を引きずり出し、キヤルはカバンをセインから引き取つて中身をチェックしだした。

「おいおい、大げさだなあ」

「僕らね、上でロックバーで会つたんだつて言つたら、君そんなに悠長にしてられる？」

セインが慎重に、右側の扉の周りを調べだす。

「ロックバードって、足が三本あって、やたら馬鹿でかいっていう？」

「うん。確かに三本、足があつたわね。私の頭くらいの鉤爪だったわ」

キヤルが答える。

「いや、なんだつてそんなモンがいるんだよ」

「ルールを守らせるためだつたみたいよ」

「でも地上での話だな?」これは地下だし、さすがに、なあ?」

それには、今度はセインが答えた。

「あの天井画に描かれた獸。あれ、もともと洞窟なんかを好む猛獸

だって言つたら?」

指力れでいるのは三三の趾を打て 黒く田刀な轡

その姿は力のよみて 性格は猶のよみて 猶猛なる

ケルヘ口ノ 僕モ 実物は見たことがない」とね

けはねぐすたと」「?」

話の中でしか聞いたことのない幻の獣の名だつたが、それと同様

の生物であるロッカバーーが地上にいたところなのだが、その地底に

ケルベロスなんてどんでもないものが生息していてもおかしくない

と、この一人は言うのだろうか。

空が発音しながら、  
「

「から縫を仕事、動かさねばならぬ」と

き切り裂く。

つがいで飼われていなかつたことを祈るしかないわね」

ふふん、と、キヤルはラゾワを笑つたが、キヤルもケルベロスなんかとはち合せば「めんだつた。

もし、つがいで飼われていて、この途方もなく広いだらう洞窟の中で繁殖なんかされていたら、たまつたものではない。

「最悪ケルベロスだとしても、他の獣かもしれないしね？」

慰めるようにセインが一人に話しかけるが、ケルベロスでないに

しても、相手はこんな闘技場で使われるような獰猛な何かなのだから、とにかくこの国が滅んだときに、一緒に滅んでいてくれていることを祈るだけだった。

右の扉を調べ終わったセインが、左の扉を調べようと、飛石を呼び寄せたときだった。

「……なんか、生臭くない？」

「……脅かすなよ、嬢ちゃん」

「……とりあえず右の扉には近寄らないでね？」

セインが二人を振り返って、えへへ、と笑った。

「て、どういうことよそれ！」

「右は獣の毛がついてたりとか端っこに爪痕があつたりとか、そういうことだよ」

「じゃあ、左は？！」

「それを今から調べようとしてたんだけど……」

カリカリカリ

爪で木を引っ搔くかすかな音が、ホールに響いた。

「い、今、かりかりって、いわなかつたか？」

ラゾワが、思わず後ずさつた。

「ラゾワ君、よく出てこれたよねえ」

コフツ、コフツ

左の扉の向こうから、何だか鼻息まで聞こえて来た。

「右も左も、獣用の扉だったってことだね」

「んな悠長なこと言つてる場合か！」

この男が本当に、はるか昔のこととはいえ、騎士で、軍師で、剣の使い手で、ひとつ目の國を滅ぼしたものなのか、ラゾワは疑いたくなつた。

ガアアアアアアア！

びりびりと、鼓膜が破れそうな咆哮と共に、巨大な身体が扉を吹き飛ばして宙を舞つた。

「げえ！」

白い体毛に巨大な牙。

輝く眼光は赤。

それはケルベロスではなかつたとはいえ、一同を震撼させた。

「サー・ベルタイガーって、んなのありかよ！」

「実際ここにいるんだからしじうがないじゃない！グダグダ言つてないで走る！」

後退しようにも、後ろの扉はセインが壊してしまつてゐる。

左の扉の奥には何がいるのか検討もつかない。

下手をすればそれこそケルベロスが潜んでいるのかもしないのだから、今サー・ベルタイガーが出てきた右の扉に駆け込むしかなかつた。

「あんたほんとこどうやつてここまで来たのよ！」

キヤルが叫ぶ。

「いいから早く！」

セインが一人とサー・ベルタイガーの間に割つて入り、白い獸と対峙する。

「セイン！伏せて！」

キヤルの言葉に、セインはサー・ベルタイガーから視線を逸らさず、脇へと飛び退つた。

ドドドン！

一瞬の閃光が三つ。

ラゾワがキヤルを見やると、片膝をついた彼女のスカートがひらめいて、ふわりと元の位置に落ち着いたところだつた。

その瞬間に、白い太ももに対のホルスターが、似つかわしくなく巻かれていたのが見えた。

彼女の両手には二丁の短銃。

ガアアアアア！

白い獸は銃声と光に驚いたのか、高々と後ろ足で立ち上がると、目を前足で擦る。

「今のうちよ！」

掛け声にセインはそのままラゾワをタックルよろしく引っ掛け、キヤルと共に扉へ走りこむと、後ろ手に扉を閉めた。

「うわ、生臭！」

セインに引っ掛けられながら、ラゾワが鼻を手で覆った。

「うわあ、右でも左でも一緒だったみたいだね？」

走つて行くと、三叉路に出くわした。

片方を覗いてみればどうやら先程の左側の扉に繋がつているらしい。

「あんた本当に、どうやってここに来たのよ」

見上げるキヤルに、ラゾワは首を捻る。

「急いだほうがいいみたいだよ？」

走りながら後ろを振り返れば、暗闇の向こうから白いものがうつすら見える。閉めた扉はあっさりと破られたらしい。

「警戒してちょっと間を置いているけど、間違いない追つて来てる

「つづり、俺よく無事だったなあ！」

飛石が照らし出す範囲はせいぜい五メートルといったところか。さすがに獣の通り道には壁画は描かれていない。

ひたつひたつひた

「やばい！」

身の軽い獣特有の足音が、背後から忍び寄つてきていた。

安全と決めたのか、サー・ベルタイガーが追つて来ている距離を縮めたのは、間違いがない。

三人は走る速度を速めたが、それで野生の獣から逃げおおせるものではない。

距離はすぐに縮まつた。

「セイン！」

キヤルの声と共にラゾワを伏せたれる。

ガウン！

一発の銃声。

ガア！ガアアアアア！

続けて獣の咆哮が上がる。

片目から血を吹き出し、白い猛獸は雄叫びを上げて数歩後退る。

「うわ、この暗いのによく当てる！」

「的がでかいからね！走つて！」

再び、一斉に走り出した。

獣は前足で地面を引っ掻き、更に三人に向けて鋭い眼光を放った。  
ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

今までとは違う声は、明らかに怒りを表していた。

ガキン！

あつさりと一跳びで追いつき鋭い爪を突き立てる。

「セイン！」

「僕はいいから、早く！」

ぎりぎりと、自らの剣でその爪を受け止め、サーベルタイガーと力勝負に持ち込む。

「ちょっとラゾワ！ どうやつてここに入つて来たのかくらい、さつさと思い出しなさいよ！」

「ままあま、待て待て待て！」

キヤルに襟首を締め付けられながら、ラゾワは必死に記憶を辿る。  
ガウ！

「！」

サーベルタイガーの牙が、セインの肩に食い込んだ。

「セイン！」

「そうだ！」

キヤルが叫ぶのと、ラゾワが叫ぶのとはほぼ同時だった。

「旦那！ こっちだ！」

ラゾワが後方を指差す。

ドン！

キヤルが威嚇に銃を鳴らすと、サーベルタイガーが、びくりと力を緩めた。

その隙について、セインが力任せに獣を横薙ぎに払う。

その際、肩の肉をいくらか持つていかれたが、それに躊躇してい  
る暇はなかつた。

すぐに体勢を立て直したサーベルタイガーは、再びセインの肉を  
喰らおうと襲いかかつて来る。

「ドン！ ドン！ ドン！

ギヤウウウン

「しつつここのよー」

キャラルの銃撃がサーベルタイガーに命中するが、全部が当たつた  
わけではない上に、玉切れ寸前だ。

弾丸を込めている時間がない。

「こんなことならカートリッジ式のほうにじとくんだつたわ  
舌打ちをしながらセインへ駆け寄り、彼を支えよつとするが、な  
にぶん身長差があつて上手く出来ない。

「何やつてんだよ、ほら！」

ラゾワがセインに肩を貸す。

「悪かったわね」

「こんな時こそ頼つてくれよ」

悪ぶれるキャラルにラゾワがワインクを返した。

「すまない・・・」

「いいつて事よ」

素直に詫びるセインに、ラゾワは肩に手を回せながら笑いかけ  
た。

暫く走ると、鉄の柵が見えた。

「ちょ、行き止まり？！」

驚くキャラルに、ラゾワは笑つてみせる。

「違う、こっちだよ」

ラゾワが顎で示す先に、鉄の扉が見えた。  
が、キャラルには重くて押し開けられない。  
グルルルル

そういうしている間にも、獣の唸り声が迫ってきていた。

「ああ、くそ、持つてろ！」

「きやあ！」

セインをキャルへ放り投げると、ラゾワは自分のランタンを足元に置いて、鉄の扉に取り付いた。

一の腕の筋肉が盛り上がる。

ギギ、ギギギイイイイ

錆び付いた嫌な音と共に、扉が押し開かれる。

自分の身体を捻り込んで大人が入れる大きさが確保できたか確認すると、ラゾワが手招きした。

「早く入れ！」

まず、キャルは力バンをラゾワに放り投げた。

次に、重いセインを引きずるように、彼女の身体が扉の中に入った時だった。

たん！

軽快な音と共に、白い影が躍った。

「きやあああああ！」

「いけねえ！」

サー・ベルタイガーが、まだ扉の中に入りきらないセインの身体に圧し掛かった。

とつさに、ラゾワはセインの剣を引っつかんで、サー・ベルタイガーワー掛けで突きつける。

ガア！ガアアアアアア！

怒れる獣は、その切っ先を払い落とそうとするが、ラゾワはそれに負けじと拳を突き出した。

どごん！

アッパー・カットの要領で、サー・ベルタイガーの顎に、ラゾワの拳がめり込んだ。

がは！

さすがによろめいた獣に、ラゾワとキャル、二人がかりでセインの身体を扉の中へと引き込んだ。

ガアアアア！

「うひゃあ！」

ドン！

キャラルが発砲した。

キュウ！キヤウウウ！

サーベルタイガーが数歩後退する。

「今よ！」

二人は懸命に扉を閉めた。

ガチヤン！

閉まつたと同時に、ドゴン！という鈍い衝撃が伝わった。

ドカン！ドゴン！

「体当たりしてやがる」

「ほんとにしつっこいわね！」

急いで鍵を閉めたが、それでも安心は出来なかつた。

「セイン！」

「あ、ああ、ごめん。大丈夫だから」

そうは言つものの、彼の肩は引き裂かれ、身体のそこかしこに切り傷が出来ていた。

「立てるか？」

「まあ、ね」

ビリビリッと、自分の着物の一部を割いて、包帯代わりに肩に巻きつける。

キャラルがそれを手伝つが、その間にも、布は血でじわりと滲んで行く。

「肉」と持つていかれたからね。・・・参つたな

切り傷のほうはなんでもないようだつたが、肩の傷はひどい有様だ。

「まあ、これで一安心だろ。来たときこや分からなかつたが、多分ここが、あれを世話する奴が使うための通路だつたんだろうな」

辺りを飛石で照らし出してみれば、壁画とまでは行かないが、簡

素な装飾に色付けがされていた。

「多分、あの鉄の柵の奥に、まだいるんだろ?」  
「たつた一頭で生き延びていたとは思えない。」

それに、小さな国だったとはいって、セインは「この国の存在を知らなかつた。」

使われている言葉は古代語。

いつから滅び、「」の生き物は「」で、命を繋げていたのか。

「あの柵の奥は、たぶん元々猛獸を飼つておくためのものだつたんだろうや。やあ、それにして俺、本当によく無事だつたよな」ラゾワは鳥肌の立つ両腕をさすつた。

「どうか、君があれを起こしてしまつたんじゃないかな」

ようよろと立ち上がりながら、セインがつぶやいた。

「へ?」

「あの手の獸は耳と鼻が格段にいいからね。それに普段はあんまり身動きしないんじやないかな。もともとサーベルタイガーは夜行性ではないからね。ここで生まれ育つて進化したとも考えられるけど、多分、獲物の気配がしたときだけ、ああやつて活動をする」

「なんだ、結局ラゾワが悪いんじやない」

「お、俺が悪いのかよ?」

情けない顔をするラゾワに、セインは笑つて答える。

「君が悪いわけじゃないよ。いつして逃げ場を思い出してくれたわけだし、それを言つたら、生き物をこんな地下に閉じ込めて、そのままにしてしまつたこの国の人たちだうつね」

「そりや、そうだけどよ」

申し訳なさそうなラゾワに、セインは溜め息をつく。

「本当に、海賊だとは思えないくらいお人好しだね」

「あんたにだけは言われたくねえなあ」

さりに情けない顔になつた。

「とにかく進むわよ。いろいろ調べ物もあるけど、一旦外に出てか

らだわ

キヤルが飛石を引き寄せて、弾丸を込める姿を、ラゾワはセインに肩を貸しながら、まじまじと見つめた。

「? 何よ

「いや、お嬢ちゃんの武器は旦那だと思つてたからよ」  
ラゾワに指を指されて、セインは不服そうだ。

「人を指差すものじゃないよ、ラゾワ」

「ああ、わりい」

そんな二人の会話にくすくす笑いながら、キヤルは器用に銃をくるくると回して、構えてみせた。

「悪いわね。私の本職はこっちなの」

剣はセインと知り合つてから使つよになつたと言つて、キヤルが先を歩き出す。

「小さいからリーチで負けちゃうのよね」

「ああ、それなら拳銃なんかは関係ないしな」  
合点がいったように、ラゾワが首を縦に振る。

それにしても射撃の腕前といい、出会つたときに垣間見せた剣技といい、大の大人顔負けだ。

剣に至つては、セインと出会つてからといつなら、始めて二ヶ月そこそこということになる。

それであそこまで使いこなすのだから。

セインの教え方が上手いとしても、もう神業に近い。

「やっぱ末恐ろしいや」

もしかしながらこの一人、最強のコンビじゃないだろうか。

出合つたときに見たキヤルの剣の腕前を思い出して、ラゾワは身震いした。

「うお?」

急に、セインを支えていた左肩が重くなつた。

「う、ごめん。ラゾワ」

見ればずいぶんとセインの顔色が悪い。

「おーおー、大丈夫かよ？」

そろりと、セインを下ろして、壁にもたれかけさせる。

呼吸が荒い。

「剣でもやつぱ怪我すりや痛そつだな」

「当たり前でしょ！」

キャラルに食つて掛かられ、ラゾワは思わず頭をかばつた。

「大丈夫？ セイン」

だが予想に反してキャラルの拳は飛んでこず、彼女はセインの側で心配そうに肩の傷を見ている。

「ラゾワ、じめん。ちょっと迷惑をかけるよ？」

「へ？ ビウこいついた。別にあんたくらい運ぶの、わけないぜ？」

「それは、頼もしい」

青ざめた顔でセインはそのままいつと、田を廻つてしまつた。すると、彼の体の陰影があやふやになり、すつと、その姿を消してしまつた。

残されたのは、先ほどまで杖代わりにしていたあの剣。どうやら剣になつた自分を運んでほしいといつことだつたらしく。

「本当に剣なんだなあ」

「何を今更」

しみじみと、ランタンで照らしたセインロズドを眺めるラゾワ。キャラルが呆れたように呟つ。

「私じゃ引き摺つむけつて運べないのよ。あんたがいてくれて助かつたわ」

「そりや、ビウも」

剣のほうが人間よりは運びやすいのでその点では助かるが、何せ

抜き身。

「・・・聖剣つてんだから切れ味は？」

「抜群にいいわよ？」

「・・・そういうかい」

どちらかといふと、人間のままでいてくれたほうが良かつたが、

などと思うが、こうして人に頼むぐらいなのだから、肩の傷は剣でいたほうが楽なのだろうか。

「しょうがねえ」

そう言うと、ラゾワは刃を外側に、峯を首に当てるといった格好で、肩にセインローズドを担いで、歩き出した。

## 先行きは不安定

「出口は思って出したの?」「  
キャラルが後をついて来る。

「んー、思い出したつづーか、まっすぐ来たんだから、まっすぐ行  
きやいいはずだ」

「ああ、そう・・・」

脱力感に襲われるキャラルだった。

「だいたい、ラゾワはどういう所から入つて来たのよ?」

「ええと、お前さんたちを下ろしたところから、島の西側へ歩いて  
探索してたんだが、途中で縦に裂けた穴を見つけて、そこから入つ  
たんだよな。最初は自然の洞窟かと思っていたんだが、進んでみて  
びっくりよ。いきなり四角く掘り抜かれた空間に出たんだからな」

それなら、北東にあるカルド岬に出なくてもいいルートがあると  
いうことだ。

死体なんかど」「対面しなくてもすむかもしれない、そう思つただ  
けでキャラルは心底ほつとした。

「ねえ、キャラル」

「うわあ!」

いきなり耳元で声がして、ラゾワは危うくセインローズドを落とし  
そうになつた。

「な、なんだよセインの旦那、しゃべれんのかよ」

「あ。言つてなかつたね。ごめん」

剣に話しかけるというのは、妙な体験だ。

さすがは聖剣というべきか何と言うか。

「さつきから思つてたんだけど、この地下つてもしかしあ、小さ  
な町になつてるんじゃないかな?」

地図を広げて、現在地を確認してみる。

さつきよりずいぶん西に反れたような気がする。

「ラゾワが洞窟を見つけたのはどの辺り?」

「・・・この辺かな?」

地図を見せれば、ラゾワが指示した場所は、海賊船クイーン・フューエイル号とは、たいして離れていない場所だった。

それに、キヤルたちが落ちた場所から、カルド岬へ続く道と、ラゾワが辿って来た道の予想と、先程の闘技場を位置づける。これだけでは分からなかつたが、もし、島全体の地下に迷路のような通路が掘られていたとしたら。

「何がしかの娯楽施設だったかもね」

先程の闘技場がいい例だが、何故地下に潜る必要があつたのか。「遺跡には違ひないけど、これだけのものがあつて、港の人たちは気がついてなかつたのかな」

「まあまあ。ただでさえ神聖な島にしちまつてるから、用がなけりや上陸もしねえだろ?」

こうやってよそ者の自分達が島に上がりこんでいるのだって、港の人々に知れたら快くは思われないのかも知れない。

「で、あんたたちはなんでこんなところに来てんだ? まさか俺たちみたいにお宝田当てつてんじゃなさそうだし」

「・・・やっぱりギヤンガルドの手下だわよね」

考えることが一緒だわ。

ぼやきながらキヤルは視線を逸らした。

「なんだよ、それ」

「べつに?」

誘拐されたとき、船の中で、この島へ行きたがる理由を聞かれたのを思い出した。

ここにギヤンガルドがいなくて良かつたと思つ。もしいたら、このままセインを持ち逃げされた可能性が高いと思われた。

それを考えれば、ラゾワのほうがお人好しすぎて、変な話、信用できるのかもしれない。

だからセインは自分の身を任せたし、キヤルはそれに文句を言わ

なかつたのだが。

「で？俺の質問には答えてくれねえの？」

顔を覗きこまれて、キャラルはむづつと頬を膨らませた。

### 伝説の楽園エルドリード。

そんなものを探しているなんて知れたら、笑い飛ばされるに決まつている。

これでも馬鹿な探し物をしている自覚はあるのだ。  
「私達が探してるのは、物じやないもの」

ボソリと言つた。

「物じやない探し物？何だそりや？」

「だから、何だつていいでしょ」

キャラルの頬はますます膨らんでゆく。

「・・・怒るなよ」

「怒つてなんかいなわよ別に」

「言いたくなきゃ別に聞かねえけどよ」

「あらそう。助かるわ」

つれないキャラルの態度に、ラゾワはひよいつと、彼女の顔を覗きこんだ。

「！・・・つと、危ないわね！」

「ラゾワ？」

坦いでいたセインをひょいと肩から外し、にんまりと笑う。

「やっぱ聞きてえな」

「はあ？」

かしゃん、と、セインを壁に立てかけて、ランタンを床に置き、そのままどつかりと座り込んでしまった。

「ラ、ラゾワ？」

セインが訝しげに声を掛けるが、ラゾワはにこにことキャラルに笑いかけるばかりだ。

「あんたね・・・。何がしたいのよ、いつたい？」

「へへへ。探し物が何か教えてくれるまで、セインの旦那を運ばないつてのはどうだ？」

「ええ！？」

髭面の大人がすることではないうえに、あんまりにも子供っぽい発想に、セインもキヤルも、ある意味不意を突かれて驚いてしまった。

「・・・ラゾワがセインを運ばなくつても、私が運ぶから別にいいわよ」

キヤルがセインに手をかけて、よいしょとばかりに持ち上げる。

「キ、キヤル。カバンもあるのに僕もだなんて、無理だよ」

「うつさいわね。飛石とかに運んでもらうからいいのよ別に！」

「ていうか、ラゾワの目的って、飛石だよね？」

なら、飛石を渡さなければいいだけではないだろうか。

「ああ、そうか」

キヤルよりも先にラゾワが納得した。

飛石はキヤルとセインに反応する。

手招きをすれば側に寄つてくるし、追い払えば少し離れたところで静止する。

それを見て、ラゾワが一人に隠れてこつそりと手招きしてみたが、ふわふわと無視されてしまった。

「最初にインプットされたのが、僕とキヤルだからだろうね。鳥の雛の摺り込みみたいなものだよ」

セインの説明に、ラゾワは眉尻を思い切り下げて、がっくりとうなだれる。

「じゃあ、そいつを貰つて帰つても、誰も扱えねえつことじやねえか」

「いや。周期があつて、何日か経つと登録者をリセットしてしまうから、大丈夫だと思うよ。貴族や王族が使っていたものは大概その血族でなければ使えないようにしていたけど、これは一般用らしい

からね

「そんなこともできんのか?」

「そうだね、作る職人にもよるよつだつたけど」

現在よりも八百年前の昔のまゝが、文明が進んでいたのではなか  
うつか。

「でも、必要がないといえば必要がない機能だしね」「  
それにしても、たいした技術である。

ドン!

キヤルがいきなり発砲した。

「何だ?」

「シツ、黙つて」

少女に言われて、口をつぐむ。

しかし、通路の奥は暗いばかりで、これといって変化がない。  
何があつたか聞こいつと、再び口を開こいつとしたときだった。

「そこにいるのは誰? 出て来なさいよ!」

キヤルが怒鳴った。

しかし、暗闇は暗闇のままで、何かが動く気配もない。

「・・・人ではないかもしれないわね」

「何だつて? また猛獸でも出てきたつて言うのかよ! ?」

舌打ちと共に咳かれたキヤルの言葉に、ラゾワは慌ててセインロ  
ズドを掘んだ。

「キヤル」

「分かつてゐるわ」

セインの声に返事を返しながら、キヤルが飛石を連れて、つかつかと歩き出す。

「え? おい? お嬢ちゃん? !」

ラゾワが驚いてその後を追おつとすると。  
げいん

「うお！」

妙な音と、妙な声が聞こえた。

「ほうら、やっぱり人間じゃなかつたわ」

「そりゃないんじやないかい？」

壁の影から顔を出したのは。

「キ、キャプテン！？」

「おう」

手を上げて答えるのは、どう見てもキャプテン・ギャンガルド。その人だつた。

「な、何でキャプテンがいるんです？」

「昼間に出来かけたつづのにお前が夜んなつても帰つてこねえから、何か見つけたんかと思つて探しに来たんだよ」

「へ？ もう夜なんで？」

どうやらラゾワは洞窟内に入り込んだせいで、時間の感覚がなくなつていたらしい。

その海賊二人から、徐々に距離を離す人影が一つ。

「化け物がいたわ、化け物が」

「さ、行こうか？ キヤル」

気がつけばセインはいつの間にか姿を元に戻して、ラゾワの手の中は空っぽだつた。

「化け物つて、俺のことかよ？ 相変わらずひでえ扱いだなあ」

ギャンガルドは愛想良く笑顔を作つて見せる。

この笑顔で、港町の女は一度にコロリと彼に惚れ込むに違いない、というような笑顔なのだが。

ラゾワのランタンを手に、二人の海賊を置いて、キヤルとセインはすたすたと行つてしまつ。

「おおうい？」

「あ、ラゾワごめんありがと」

「その飛石はランタンのお礼代わりと言ひ切ら何だけどあげるから気にせずもらつちゃつて」

すちやつ、と、キヤルもセインも片手を上げて、一瞬こちらを振り向いたかと思えばそんなことを口早に残し、後はひたすら離れて行ってしまう。

ギャンガルドの笑顔光線は、この一人に効果はなかつたらしい。

「こら」

すたすたすた

「こらこらこらー」

すたすたすたすたすた！

「待てつて言つてんだろこらー。」

「いいえ一言も言つてません。そもそも言われたところでイヤです」

「そよう待つてたまるもんですか」

ギャンガルドが一人の後を追つが、一向に止まる気配がない。

「船に乗せてやつたろうが！」

「誘拐したのはダレですか」

「言い訳にもなんないわね」

すたすたすた

「タ力の飯は旨かつたろうが！」

「あれはタ力の腕がいいからよ」

「自分の部下だからつて恩着せがましく言つのはまさに恩着せがましいよね」

すたたたた

「た、頼むから待つてくれ」

「嫌デス」

「まつたくよ」

泣く子も黙る天下の海賊王も、この一人の前ではかたなしである。

「出口が分かるのかよ！？」

一瞬立ち止まろうとした一人だったが、  
てくてくてく

「自分で見つけるし」

「壁に沿つていけば出れないなんてこともないだろうし」

また歩き出してしまう。

「うわあ、キヤプテンが相手に全くされてねえ・・・  
ぽかんと口を開けたままついて来てしまったが、滅多に見られな  
い面白いものを見てしまった気がする。」

「ラゾワ！」

「へい！」

「変な感想漏らすんじゃねえ」

「ぼそっと呟かれた。

これは真剣に怒っているのかもしれない。

「あ、ハツ当たりよハツ当たり」

「イヤですね、大の男がハツ当たり」

「あつ、バツカお前ら！」

火に油を注ぐ二人を止めようつと、慌てて走り出す。

「ふ、ふははははは！」

だが、いきなりの大笑いに、ビクリと止まってしまった。

「ようし、楽しいじやねえかこの野郎！」

殺氣立つ聲音で凄んでみたのだが。

「いつつも人をおちよくつておいて今更楽しいとか言われても」「ねえ？」

一人の足はそれでも止まらなかつた。

ギャンガルドの左の眉が、ピクピクと引き攣り、海賊王は、大き  
く深呼吸した。

「この先でちょっと変わったモン見つけたんだがな？」「  
なんだかヤケクソじみた言い方ではあつたが。

ぴた

ようやく、キヤルとセインの足は止まつた。

## 海賊王の思惑

「何よ、変わったものって」

うろん気に、キャルがギャンガルドを見上げる。

「俺には読めなかつたんだが、どうやら古代文字っぽかつたんでな。大賢者サンになら、読めるんじやねえかと思つてよ」

海賊王はにやりと、例の不敵な笑顔を張り付かせた。

「・・・あんたの目的つてそれじやなかつたの？」

キャルが、ラゾワが抱え持つ、青く光る飛石を指さした。

「何だ？？」

「あ、キヤプテンこれ」

ラゾワが差し出す青い石に、ギャンガルドは目を輝かせた。

「浮石か！？」

「へい。そこの二人にもらつたんですが」

ラゾワがキャルたちを見やる。

「浮石じゃなくて飛石。まあ、どっちでもいいんだけどね」

セインが答える。

「もらつたつて、お前」

「ランタンと交換よ。私達、その石ランタン代わりに使つてただけだから」

今度はキャルが答えた。

「ランタンとこいつじゃまるで価値が違うんだが、知つてんのか？」

「今はそんなことより、君の見つけたつて言つ、古代文字のほうに興味があるんだけど？」

「・・・・・怖えから、微笑まないでくれるか？」

にっこり微笑むセインに、ギャンガルドもにっこり笑つてみる。

信用できないとばかりにセインもキャルも、警戒心丸出しだ。それを横から眺めるラゾワは生きた心地がしない。

先ほどまで調子を崩されていたとはいえ、今はけろりと一人の正

面に立つギャンガルドはさすがとこうのか。

「つ、こにタ力の野郎がいてくれたらなあ

あいなら、この場を上手く取り繕ってくれそうなのこ。

気の良いコック長の顔を思い浮かべたら、一気に腹が減つた。  
ぐつぐつぐつ

「あ

体は正直だ。

「何今」

セインが振り向いた。

「俺の腹の虫だ」

「威勢がいいね」

「・・・そうだな」

情けねえけどありがとう俺の腹の虫ー

一斉に注目された自分の腹に、ラゾワは感謝した。

正直この三人のかもし出す険悪ムードは勘弁してほしかった。身の置き場所がないどころか洞窟内で逃げ場所もない。

「よし」

ぽん、と、ギャンガルドが手を打った。

「とりあえず俺が見つけた部屋に行つて、飯だ」

うれしそうだ。

「飯つて、あんた手ぶらじゃない。どこにご飯があるのよ

「それはその部屋へ行つてからのお楽しみだ」

にんまりと笑う。

また例の、楽しんでいるあの顔だ。

キヤルはげつそりした。

が。部屋、という言葉も、古代文字、という言葉も気になるのは確かなので、仕方なくギャンガルドの後についていくことになった。

「・・・本当に仕方なさそうだな?」

「だって仕方ないもの」

その、ギャンガルドの言う部屋を自力で見つけるのも手だが、そ

れでいつまでたってもここから出られなかつたらシャレにならない。

それに、セインの肩の傷も気になつた。

ギャンガルドの手前、意地でも剣だけの姿になるわけにもいかない。

先ほども今も、結構無理をしているのではないだろうか。

「セイン？」

見上げてみれば、心配ないよと、優しい笑顔が返つてくる。

一度剣の形をとつたから、大分楽にはなつていると本人は言つたが。

程なく、案外早くに、目的の場所にたどり着いた。

長い廊下の両脇は、同じような扉が並んでいて、まるでホテルを連想させる。

「ここだ」

着いた部屋は、回りの扉に比べて、結構頑丈そうな扉がついていた。

「・・・・で？」

「でつて？」

「ご飯は？」

「この中だ」

「・・・・・

当たり前だらう的な返事に、キャラルはムツとする。

「あんた開けなさいよ」

こういう男だ。

絶対中に何かあるとみて間違いない。

「お？」

「お、じゃないわよ、一回この中開けてるんでしょ？」

「んー」

のうりくらうと、ぐずるギャンガルドに苛立ちが募る。

「・・・何よ」

「実は開けてないんだなこれが」

「はあ？」

では中で「じゅうじゅう」飯があるなどと云つのか。

「あんた、お弁当か何かタ力に持たせられたんじゃないの？」

「持たせられた」

「この中に忘れて来たんじゃなかつたの？」

「忘れたってゆうかなんと言つか

忘れては来たのだ。

この扉の中に。

だが一度、閉めてしまつたらびくともしないのだといふ。よくよく見れば、ドアノブに向か文字がびつしりと書かれている。

田を凝らしてみれば古代文字のようだつた。

だから、セインがいればなあ、と思つたのだが、会えるとも限らない。

仕方がないから暗闇に田が慣れた頃に、当初の田的じおりラゾワを捲し歩いていたらまたま自分達を見つけた、ということじかつた。

「そういえば、ギャンガルド、ランタンとかランプとか、持つてなかつたよね」

この真つ暗な中、それによく歩き回つたものだ。

「いやあ、それもこの中に忘れちまつてよ」

ばつが悪そうなギャンガルドに、セインは溜め息をついた。

「ちよつとどいて？」

邪魔とばかりに海賊王を押しのけて、古代文字が書かれてこるというドアノブを解読にかかる。

「ええと・・・・・」

セインがぶつぶつと読み始め、すべて読み終えると、自然に扉は力チャリと音をたて、キイイ、と開いた。

「開け胡麻みたいだな」

「鍵みたいなもんだからね」

感心そうなギャンガルドに、セインはちらつと疑わしげな目線を

送る。

「キミ、だいたい最初はどうやってこの中にに入ったのさ?」

「開いてたもんだから普通に?」

「へえ?」

最初から開いていたからつい中に入つてみた、とでもいうのか。

「そうだったとして、なんで忘れ物なんかしたのさ?」

弁当ならともかく、照明具まで。

「慌ててたからな」

そう言いながら、ギャンガルドはひょい、と部屋の中を覗いた。つられて、安全なのかと、残りの三人も中を覗く。ふわりと、飛石が先に中に入った。

中は結構広い部屋だ。

ちょっとした調度品が置かれていて、ベッドまである。

しかしすべての家具が、華奢な彫刻を施されてたり、フリルの付いた小物が置かれているたりと、ちょっと女性向きの趣がある。宿泊施設のものにしては豪華ではあったが、何の変哲もない、といえば、何の変哲もないように見える。

壁の向こうの、大きな肖像画の女性が、きれいなドレスを着て、柔らかく微笑みかけていた。

「あ。弁当発見」

ラゾワが部屋の中心に置かれたサイドテーブルの上を指差した。ギャンガルドが忘れていったのであろう、火の消えたランタンと、丁寧に包まれた小包が見えた。

「あ!馬鹿!」

コトリ、とラゾワが足を踏み入れた途端。

肖像画の女性がカツと目をむいた。

「へ?」

気付かずにはラゾワは弁当とランタンを手にしていたが。

ごうん、という音に反射的に身を屈めた。

チチチチチチ!

「うおおおお？」

小さな黒い物体が、大きな集団となつて飛び交い始める。

「ラゾワ！」

抜けそうになる腰を叱咤しながら、ラゾワは入り口へと這いずつた。

「いていて、いて、いてて！」

それでも見る間に、ラゾワの身体は黒く覆われて見えなくなる。

「ち！」

ギャンガルドとセインが飛び出して、素手で黒い塊を搔き分け、ラゾワを引きずり出した。

その間にも、三人はあちこちを噛まれる羽田になつた。

「キヤル！ ランタンを！」

「今やつてるわよ！」

セインに言われるより早く、キヤルはベッドのシーツを剥ぎ、鏡の前にあつた青銅の大皿の上に、中の油をぶちまけて浸し、そこへ火をつけた。

チチチチチ！

辺りが炎に照らし出されると、小さな獸の大きな集団は、ばさばさと部屋から逃げ出し、通路の向こう側へと騒ぎながら消えていった。

「な、何だつたんだ、今の？」

服のあちこちを噛み切られ、といふじる傷を作つて、ラゾワは呆然としていた。

「吸血蝙蝠ね」

「ご名答だ」

肩で息をしながら、ギャンガルドが言ひ。

「やつぱり油断がならないんだ」

セインはぶつくさと文句を言いながら、油を出してしまつて、火が消えかかってしまつているラゾワのランタンの代わりに、ギャンガルドがこの部屋に忘れていた方のランタンに、火を移す。

景気よく燃える青銅の皿の上のシーツは、辺りを良く照らし出してくれていた。

肖像画は最初に見たときのよつこ、優しく微笑んでいる。

吸血蝙蝠がたまたま瞳のところにいて、皿を見開いたかのよつこ見えただけらしい。

「ああ、びつくりした」

「すまねえな、まさかお前さんが足を踏み出すとは思わなくつてな

「ひでえつすよ、キャプテン」

床に座り込んだラゾワに、ギャンガルドが笑いかける。

「まったく。部下を何だと思っているのかって言つ前に、私達を何だと思っているのかしらね？！」

「あー、それ、是非聞きたいたなあ

「いや、だから。・・・・・微笑むなつて。怖えから

と、口では言つものの、ギャンガルドはビン吹く風、といつた態

だ。

「開いてたから入つたつて言つのは本當だぜ？あれに襲われて部屋を出たときに、弁当とランタンを置きっぱなしにして閉めちまって、戻ろうと思つたらもう開かねえ」

途方にくれても仕方がないから、とりあえずラゾワを探して通路を歩いていた、といふ、行動そのものが、確かにギャンガルドらしいといえばらしいのだが。

「無謀といえば無謀よね

「んだよ、しつかり会えたんだからいいじゃねえか」

あきれ返るキャラルを尻目に、ギャンガルドが弁当の包みを開く。

「それは結果論でしょう。・・・ああ、もつ。ビンじたらこんなのが作れるのか今度聞いてみなくちゃね

キャラルの田線はすでに、タ力の弁当へと注がれている。

ラゾワに至つては、今にも飛びつかんばかりである。

話を聞くところによると。

「うへえ！助かりますぜ！何せ朝食つただけで、昼も夜も時間が分

からなくつて食つてねえんです」「

といふことらしい。

「それにしても、一人一人分にしちゃ多いわね」

「おう。まあ、他の連中と、洞窟に入る前にはぐれたからな

「・・・あんたの手下って、苦労してそだものね・・・」

その、はぐれたかわいそうな手下達の分は、キャルとセインで頂けるのだから、まあ、良かつたのかもしれないが。

弁当を食べ終わるまで、一同はとりあえずこの部屋で休息をとることにした。

「キャル、眠いなら寝てもかまわないよ? ちょっとビッシュドがある」とだし

「いいわ。寝ようにも寝られないもの」

セインがキャルに睡眠をとることを勧めたが、寝ている間にセインを連れ去られそうな気がして、キャルは心配で目が冴えてしまっていた。

「俺なら大丈夫だぜ? 少しは信用しろよ」

「今さつきあんなことした奴が、よくもぬけぬけしゃあしゃあと、そういうことをぼざくわね?」

キャルの視線は、片時もギャンガルドから離れない。

こんな油断も隙もない奴の側に、自分達がいること自体が信じられない。

本当ならさつさとここで分かれて、自分達は自分達で違うルートを辿ればいいのではないか。

たとえ出口がカルド岬であつたとしても、だ。

だがしかし、やはりセインの怪我が気になつた。

「キャル? 僕のことなら気にしなくともいいから

「いいのよ、本当に眠気がおきないだけだから。あんたこそ、あたしのことは気にしなくてもいいわ?」

セインが気遣ってくれるのは嬉しいが、セインにしてもギャンガルドが信用できないから人の形をとつたままでいることは、良く分

かつていた。

「さつきの吸血蝙蝠のことは謝るぜ？けどよ、吸血蝙蝠が中にいますって言つたら、開けてくれたかよ？」

「へえ？ そこまでしてあんたは弁当が大事だったの」「弁当とランタンを取りに来るだけで、なんで騙されなきやならないのか。

「だつて、腹が減るじゃねえか」

「・・・・・・・・・・・・」

キヤルは殴りたい衝動をからつじて押さえ込んだ。

「のりりくらりとこの男は！」

いつか絶対に仕留めて、役場に突き出そう、そうしよう。そんでもつてその金で豪遊して、好きなもん買い漁つて、好きなもん食いまくつてやる！

心にそう誓つ。

「それはそうじ、キヤプテン、これからどうじやす？」

腹が膨れて満足したらしいラゾワが、腹をさすりながら聞く。

「うん？ 目的のものは手に入つたし、この一人にはこの部屋へ来てもらつたし、後は外へ出るけど？」

「・・・ちょっとまた」

妙に引っかかる言い方をするギャンガルドに、キヤルは睨みを利かせた。

「この部屋に来てもらつたつて、どうこいつことよ？」

「・・・そのまんまだが？」

ひぐ。

キヤルの頬が引きつる。

「もらつたつて、いかにもな言い方よねえ？」

キヤルがぎろりと、ギャンガルドを睨みつけた。

「何？ ギヤンガルド。君、そういうもつたいぶつた言い方良くないよ？ 用があるなら言つて」「らんよ」

一人のやり取りを見ていたセインが、まるで子供を諭すよつて言

うので、海賊王は言葉に詰まつた。

見た目が自分より年上でも、三十路そしやのギヤンガルドは、何百年も生きているセインから見れば、実は子供みたいなものだつた。

「……えつと？」

「うわあ、キヤプテン子供みたいっすね」

目が点になつたままのギヤンガルドに、ラゾワが追い討ちをかける。

「お前は早く飯食つちまえ！」

「へーい」

おとなしくサンドイッチに手を伸ばすラゾワだが、キヤルとセインは依然、ギヤンガルドから視線を離さない。

「あー、別にまた騙そつてんじやねえんだ。あんたらの探し物が何か、ずっと気になつててね」

「あ！ それ俺も気になつてやした！」

ラゾワの賛同を得て、ギヤンガルドは一人の視線を真っ向から受け止め、にやりと笑つた。

例の、あの不敵な笑みだ。

「その笑顔、嫌いなのよね」

「何でも知りたがるのは、悪い癖だよ？」

そのギヤンガルドの笑みを受け流して、セインもキヤルも、いかにも嫌そうだ。

「大体、私達が探し物してるなんて、あんたに言つた覚えがないんだけど？」

腕組みをして、キヤルがキラリと睨みつける。

「俺も聞いた覚えがねえな？」

「なら、なんで自信満々なのよ」

「ああ、そりや、ほれ」

キヤルを攫つてきたときに、キヤルがギヤンガルドにこの島で何か見たか聞いたことがある。

「ああ、あれ？あれがどうかしたつていうの？」

「あんまり必死だったからも、ちょっとと気になつたわけだ」

「・・・それでどうして探し物なのよ」

「うせん臭そうに、キヤルは海賊王をねめつけた。

「浮石のことかと思つたが、お嬢ちゃんは物ではなくて、何か見たか、つて俺に聞いただろ。ああ、こりやあなんか、面白いなあ、とそれにプラス、大賢者・セインローズドの『』登場で、『』の宝剣にかかる何かだらう、と検討をつけたらしい。

「具体的に言つたらセインは関係ないわね」

樂園なんでものが、武器であるセインとかかわりがあるわけはない。

探しているのはセインのためだが、大賢者セインローズド、という宝剣とかかわりがあるのかと言われれば、それは関係がないのだった。

「じゃあ、やつぱり探し物してるんだ？」

「うれしそうなギャンガルドを、うるん気に見上げる。

「まあね。けど、本当に、あんたたちの興味をそそるようない』立派なお宝でもないし、お金にはならないし、触れることも出来ないものよ」

「なんだそりや。なぞなぞみてえだな」

「存在 자체がなぞなぞみたいなものだもの」

すでに探し物があることは、ラゾワに話してしまつていて。適当に言つて、適当にあきらめてもらおうと思つたのだが。

「キヤル。探し物、見つかつたかも」

## 油断大敵

ギャンガルドとキヤルの攻防に、口出ししないで一点を見つめているかと思ひきや。

隣にいるキヤルに聞こえるか聞こえないかの小さな声だったとはいえ、なんてことをこの場で呟くのか。

「あ、あんたね、もうちょっと時と場合を考えられないの?—」

「だからこうして小声で話してるんじゃないか!」

なにやら急に後ろを向いて、壁に向かつて「ソノソノしだした二人だ。

「んだよ?なんかあつたのか?」

「「ちよつと黙つてなさい」」

一人同時に一喝されて、少々黙つてみるとある。

「キヤプテン、ほんとに子供みてえですよ」

「んー、でもなあ。ブラッディローズと大賢者、同時に振り向かれて黙れと言われたら、黙るしかないだろ?」「

「そりやそうつすけどね」

あくまでほほんとしている自分の船長は、ラゾワは首をすくめる。

「でー!ギャンガルド!」

「んあ!…?」

急に名前を呼ばれて驚く。

「僕らをこの部屋に連れて來たって、どうこうことなのかさつさと教えてくれないかな?!」

胸倉を掴まれんばかりの迫力に気圧されて、数歩後退した。

「ああ、それならもう気付いてんだろう?壁だよ

「やつぱり!」

青銅の皿の上のシーツは、蝙蝠を追い払ったときほど勢いはないものの、セインの持つランタンと飛石とで、ちぢぢりと壁の文字

を浮き上がらせていた。

この部屋の壁にも、例に漏れず壁画が描かれている。

あの闘技場の通路と違つて、居住区らしい場所に入つてから、通路の壁に壁画が描かれていたのだが、この部屋のものはなんとなく雰囲気が違う。

絵は変わらず、この国の人々の日常を描いていたが、文字がまるで殴り書きでもされたかのような書き方だつた。

「俺もさあ、不思議には思つたんだ。他の部屋は押しても引いても開かないってえのに、この部屋だけ、誘い込むように扉が開きっぱなしになしだつたんだからな」

ではこれは、この部屋の住人が最後に書き残した文字だとでも言うのだろうか。

「古代文字だろ？ それ。俺は読めねえんだ。大賢者を連れてきたほうが早いかと思つてな」

その割にはずいぶん勿体つけたものだ。

痛む肩に負担がかからないように壁にもたれ、セインは殴り書きの文字にランタンをかざす。

文字は壁画の上にまで書かれており、やはり住人が書き残したものであるらしい。

「・・・・・」

がつくりと、セインがうなだれた。

「な、何よどうしたの？ また違つたの？」

「んー、ほら、こここの國、攻め滅ぼされたって言つただろ？ それが、滅ぼされる前にシェルターを作つたんだよ、避難用にね。それがこの地下だつたみたいだね」

「そ、そんなことが書かれてるわけ？」

「いや、内容的にはこう

『このシェルターに辿り着いたら、再び逃げよ。ここは知られた約束の地で会おう』

「なにそれ？」

「だから、暫くは隠れて暮らしていられたんだね。暇つぶしに闘技場を見物しに行くくらいはね。でも限界がある。植物は田の当たるところでなければ育たないし、家畜の世話だって大変だったろう。おそれくそれらは地上でひとつそり行っていたんじゃないかな。それが、敵国に見つかってしまって、ここまで攻めてこられた」

それで、書き置きをして逃げたのだ。

「でも約束の地って？」

「落ち合ひの場所を決めていたんじゃないかな。国が滅んでも、民族は生き残るわけだから」

セインはこの、「約束の地」という部分だけを読み、探し物が見つかったかと思つてしまつたのだ。

「へえ？ やつぱこんな古代文字でも読めるんだ」

いつの間にか、真後ろにギャンガルドが立つていた。

「古代文字つつても、いろんな文体があるんだな。こんな殴り書きの、ミニマズがのたくつたようなのでも、あんたにや読めるんだな？」

妙に感心するギャンガルドに、セインは変に危機を感じた。

「・・・君、やつぱりうさん臭いよ？」

セインが肩を押さえたまま見上げた。

「うん？ ううか？ そりゃ、俺がうさん臭いことを考へてるからじやねえか？」

セインが手を合わせようと肩から手を離したときだつた。

その手をギャンガルドにがっしりと掴まれて、剣を出すのを阻まられる。

そのまま器用にぐぬぐぬと細い鎌で両手を縛られ、瞬く間に担がれてしまった。

「ちよ、何！？」

「へへ、頂いてござ。なんならお嬢ちゃんもついて来いや」  
あつさつと、長身のセインを軽々と肩に乗せて走り去るギャンガルドに、キヤルもラゾワもあっけにとられて一瞬の間、身動きが取

れなかつた。

「セ、セイン！？」

慌ててキャラは銃を構える。

ドドンー！

「はつはつは！当たらねえよ！」

ムカつく声が聞こえたが、実際ランタンも持たずには逃げ去るギャンガルドは、暗闇にまぎれてしまつてよく見えない。

「ちよつと！ラゾワ！これってどうことよ！」

隣で突つ立つていたラゾワの服の裾を引っぱつて、無理やり屈ませた。

「お、俺だつてわかんねえよ！つてえか、俺置いてけぼり？！」手下まで置いていつて、逃げてしまつなど、なんたることか。キャラは頭に血がどんどん昇つていつた。

てつぺんから湯気が出そつだ。

「追うわよ！これ持つて！」

ぱい、と自分のカバンをラゾワに放り投げ、飛石を呼び寄せて、物凄い勢いでギャンガルドの後を追いかけた。

「あんたよくあんなの手下やつてられるわね！」

「面目ねえ」

眉を吊り上げて走るキャラは鬼気迫つて怖いものがあつた。

それに比べてラゾワは、もう情けないやら、何やらで、泣きそう

だつた。

「お、結構いいケツしてんじゃねえか」

「・・・男の尻触つて楽しい？」

追つてくる一人とは逆に、なんとものんきな会話である。

「なんでこんなことしたのヤー！」

担がれて両手を括られ、抵抗らしい抵抗といえど足をばたつかせるくらいだが、屈強の海男には全く効果が上がりず、揺れるせいで痛む肩をかばうことも出来ず、セインは声だけでも張り上げてみる。

「いやあ、実はお前さんに頼みたいことがあってな?」

「頼み事だつたらこんなことをする必要がないだろ?」?

「だつて追われてみたほうが楽しくないか?」

「…………君つて、君つて奴は…………」

怒りのあまり、このまま剣に姿を変えてやろうかと思う。

そうしたら刃でさつくりといふこと間違いなしだ。切れ味には自信があるし。

「……今物騒なこと考えただろ?」

「……よく分かつたね?」

振動でどんどんずれていく眼鏡を、何とか直して前を見る。  
担がれているから、セインの前方は今走つて来た方向になり、飛石の青い光でキヤルが追つてきているのがわかつた。  
もうすぐ射程距離に入る。

さすがに大人一人担いでの逃走は、足が鈍るらしい。  
追いつかれるのは時間の問題じゃないのかな?」

「ちょっと、カマをかけてみる。

「んー、いいんじゃねえか?」

「キヤルにどんな目に合わされるか、僕知らないよ?」

「あー、ゴールデンブラッディローズだからなあ。……うーん」  
急に悩みだしたギヤンガルドに、セインは思わず溜め息が出た。

「……今更後悔しても遅いんだけど?」

一応、年がら年中海の上にいるこの男の耳にも、キヤルの一いつ名はよく入っているらしい。

狙つた賞金首は逃がさない。

相手も自分も、たとえ血だらけになつても必ず仕留める金の髪の悪魔。

それで、いつの間にか付いた二つ名が、ゴールデンブラッディローズ。

「君はもつ、今日の出来事だけで狙うに値するだらうから、標的にされるよきっと」

「妙なところで脅されても」

「あんまり知られてないことだけ、殺しはしないからその点は安心出来るよ？」

「妙なところで慰められても」

セインはきっと自分も殴られるだらうから、溜め息をつきつき、元凶のギャンガルドに出来るだけ精神的なお返しを試みる。

「お、見えてきた」

ギャンガルドの声に、無理やり後ろを見てみると。進行方向に薄青い光が見えた。

「あれ、出口？」

「そ。俺が入つて來たな」

光に向かつて、ギャンガルドはどんどん突き進む。ぱぱん！

という音が、今度はキャラのほうから発せられ、音と共に光が跳ぶのが見えた。

チュイン！

近くの岩に、弾が掠つた音が、耳元で弾けた。

キャラの威嚇射撃だ。

「キャラ！」

呼びかけてみると、遠くから声が返つてくる。

「セイン！ 無事？」

「僕なら大丈夫だから！」

担がれながらで説得力に欠けるが、とりあえず無事を伝えたい。

「もう追いついて來たのか」

ギャンガルドが奥を振り返る。

「きやふてーん」

間抜けな声に、ギャンガルドは転びそうになつた。

「ああ？！」

ラゾワが手を振っている。

「そういうや類、ラゾワを置き去りにしたつけね」

「あー、ちょっとどうしようかと思ったんだけどなあ」

そもそも、ラゾワを探しにここへ来たのだろう。ひょっともし  
しようかと思った、とは何事か。

本人が聞いたら、さぞかし嘆くことだらう。

「ま、いいか

「え？」

軽く、ウキウキと楽しそうにギャンガルドが呟いたかと思えば。  
ふつと、振動がなくなつて、変わりに下から圧迫感が迫る。

「ひえええ？」

実は担がれたまま落下していた。

一方、目の前に見えていた影が、不意に消えたことにキャラルは焦

りの声を上げていた。

「きやあ！ 消えた！」

「どういうこつた？」

急いで駆け寄つたが、足元が崩れる感触に反射的に後ろへ飛びの  
いた。

「な、何だ？」

キャラルの後ろにいたラゾワに、どんどんぶつかつてしまつたが、キ  
ヤルはそれどころではない。

飛石に照らし出せると、足元に大きな穴が開いていた。

「反射神経いいな、嬢ちゃん」

中を覗くと、ギャンガルドが依然、セインを抱えたままこちらを  
見上げていた。

「返しなさいよ…セイン…」

「キャラル！」

声をかけると一生懸命こちらを振り向こうとしているのが見えて、  
ほっと息をつく。

肩の傷は一度剣になつたために、思つたほど酷くはないのだらう

が、まだ大丈夫なようだ。

「今行くわ！」

高さはそれほどではない。飛石を使わなくても降りられそうだ。

「俺、どうしよう？」

前方の出口らしき光と、キヤルの顔を交互に見て、ラゾワがつぶたえる。

「あなたは好きにしなさいよ。でもカバンは返して…」

キヤルから彼女のカバンをひつたくるようにとられる。

「あ、嬢ちゃん！」

止める暇もなく、キヤルの小さな体は穴の中に吸い込まれてしまう。

下を見れば、着地してすぐに立ち上がったキヤルが、鉄砲玉みたいに走り出したところだった。

飛石の光もなくなつて、ランタンがあるとはいえ、急に暗くなつたように感じた。

「あー、とにかく、援護だ援護！」

ラゾワは出口に向かって走り出す。

「でも、どっちの援護だ？」

立場的に言えば明らかにギャンガルドの援護を呼ぶのが当たり前なのだが、ラゾワはどちらとも決められずに、とにかく船へ一旦戻ることだけを考えた。

## 隠されたもの 隠したもの

「うひょおー」

迫り来るキヤルの弾丸を耳に、ギャンガルドはそれでもセインを離さない。

担がれ続けて、セインもによいよ疲れ果てていた。  
肩は痛むし、男に尻は触られるし。

本気でセインロズドに姿を変えようかと考える。

「思つたんだけどよ」

「なんだよ」

いかん。

口調までやさぐれている。

「銃つて反則じゃねえか？」

応えるのもうつとおしこと思つたら、変わりにキヤルが叫んだ。

「お生憎さまねー私の本業はこっちなのよー！」

「うそーん？！ガンマンかよ？」

そんな会話が出来るほど、三人の距離は縮まっていた。

「おー見えたー！」

ギャンガルドがそう呟んだかと思えば。

「ええ？！」

「ぼーい、とばかり、セインは放り投げられていた。

「うわわわわっ！」

驚いた拍子に、思わずセインロズドに姿を変えた。

「セインー！」

「うひょあー！」

からからと、床の上で滑りながら回転して、目が回つやつだ。  
走り寄ったキヤルに拾われて、何とか回転から免れたものの、ギ  
ヤンガルドが何を考えているのやら、さっぱり分からぬ。

おかげで両手を縛つていた鎖は解けたが。

「おお、よく回つたな」

「ひひー！」

散々抱がれて、痛い思いをさせられた拳句に放り投げるかこの男は。

叫んでみるが、たとえキヤルとはいえ、八歳の少女の胸に、しつかり抱きとめられた姿では迫力に欠けた。

「セイン、これ・・・」

キヤルが呆然と辺りを見渡すので、剣の姿のままではあつたが、セインもキヤルの視線を追つてみた。

「俺があんたを連れてきた理由、分かつたかい？」

「・・・」

そこには、ほの青く光を放つ石たちに囲まれた花の棺。透明な棺に蓋はなく、ただ花に埋もれて、そこに佇んでいる。

「・・・この人は？」

「きれいだろ？」

棺の中に横たわる、豊かな黒髪の女性は、今にも起きだしそうな、息遣いが聞こえてきそうな、そんな風に見えた。

「なんだって、こんな所に？」

セインが震える声で呟いた。

「やっぱ、あんたの知り合いか」

「え？」

セインは、驚くキヤルの手から離れて、再び人の形をとった。

棺の前で、ひざまづき、そつと黒髪に触れる。

「知り合い、というのとは違うな。この子は、多分、彼女の子孫だろう。とても、よく似ているよ

遠い昔にセインを愛し、信じきれなかつた女性。

彼女の面影が残る面差しに、セインは声が震えた。

「・・・もしかして、君の奥さん？」

セインがギヤンガルドを振り返る。

「よく分かつたな？」

「だつて書いてある。愛する海賊王に、永遠の愛と尊敬を」

「ああ、やつぱりそれ、古代文字か」

キヤルが、とてとてと、セインの隣にやつてくると、棺の中を覗き込む。

「・・・きれいね」

「自慢の嫁だつたさ」

それが、殺された。

「俺が留守の間にな。航海に連れて行けばよかつたと、今でも思うよ」

ギヤンガルドが、初めて真剣な顔を見せた。

「君が僕をここへ連れてきた理由って、この棺に書かれた古代文字を、読んでほしくて？」

「おう。俺には読めねえんだな」

「・・・彼女と君はずいぶん仲が良かつたようだね。君のことばかりだ」

「まあ、な。」こいつにしゃ、「家族がなかつたんでな」

「・・・そう」

読み始めるセインの声に耳を傾けるギヤンガルドの姿は、とても寂しそうに見えた。

「大丈夫かい？」

「おつと、いけねえ。へへ」

こぼれそうな涙を、ギヤンガルドは笑つてごまかした。  
棺に刻まれていたのは彼女の遺言。

そして。

「このこと、君は知つていたんだ」

静かに、ゆっくりと、セインはギヤンガルドを見やつた。

「ああ、だから、あんたのことはすぐに分かつた。話に聞いていたからな」

「それで、すんなり納得していたのか」

手の平から剣を出すのも、子供が聖剣を持っているのも。この海賊王は全て驚かず見ていた。

「それとは別にしたつて、喉から手が出ちまつくらいに、セインロズドは欲しいけどな」

権力や富なら、自分で手に入れる事が出来る。だから、千の知恵も万の力も、いらない。ただ楽しみたい、それだけで大賢者、聖剣セインロズドが欲しいのだと、ギヤンガルドはそう言つて、笑う。こんな男と一緒にいたら、いくつあっても身はもたないと思うが、ギヤンガルドの本心を隠さない、遠慮のない態度が、セインには気持ちよかつた。セインはそんな彼に、仕方がないとばかりに笑い返して、彼の妻の棺へと目線を戻す。

遺言の一文として。  
書き記されていたのは。

はるか昔に、愚かな一人の女が、恋人を信じきることが出来なかつたために犯した、罪の物語。

一族の女は延々とそれを語り継ぎ、だから一度信じた恋人は、何があつても信じ続けると、自分もそうしてきたことを誇りに思うと、彼女の遺言に刻まれていた。

「あんただろ。剣になってしまった、この男つて」

「君は本当に行動が知れないけど、御礼を言わせてもうつよ。ありがとう」

その礼は、肯定を示す。

セインは立ち上がり、ギヤンガルドに手を差し出した。

「俺も、これですつきりしたよ。何せこいつ、人目に触れたくないとかでこんなところに墓は作っちゃうし、一族の慣わしだかなんだかで古代語で遺言残すわで、俺も困ってたんだ」

照れくさそうに、ギヤンガルドはセインの手を握った。

いまだに続く王族の血脉が、こんな風にある」と事態おかしなことだ。

が、セインと王女の物語が刻まれているところを見ると、かの王女は、セインが剣になってしまったあと、追放されてしまったのかもしれない。

もしかしたら、元の恋人を想つあまり、自分で城を出たのかもしない。

そう思つてしまつのは、己惚れだらうか？

「彼女も、辛かつただろうに」

改めて、棺の中の、女性の顔をみやる。

自分が、まだ王女の顔を覚えていたことに驚きながら。

「ねえ、一千万ゴーラド

「なんだ？そりゃ俺のことか？」

一千万ゴーラドは、ギャンガルドに掛けられた賞金金額だ。

「嫌ならギャンギヤンって呼ぶけど？」

「……じつちかつたらそつちにしてくれ」

セインの隣にたたずんで、じつと棺を見ていたキャラルが、急に声を上げた。

この呼び方は、今までのギャンガルドの仕打ちに対する嫌味らしかつた。

「この人が亡くなつたのはいつ？」

「ああ。もう一月経つな。この石のおかげで、生きてるみてえに見えるけどよ」

棺の花の周りに置かれた青い石は、彼女の一族にまつわるものだといつ。

「けど、もういいやな」

ふわふわ浮かぶ飛石を捕まえて、棺の横に据えられた台の上に置くと、青い石は一斉に浮き上がり、光の粉になつて砕け散つた。きらきらと輝いて、すうっと、消えてなくなつてしまう。

あたりはまた、闇に閉ざされる。

「誰に殺されたか、分かつているの？」

「・・・名前まではわからねえ。が、見た奴の話じや、真っ黒いフードを目深にかぶつた、左頬にでかい傷のある男らしい」「ひとり、と、ギャンガルドが飛石を台座から外す。

「・・・見つけた」

飛石のおぼろげな光だけが浮かぶ闇の中に、キヤルのかすれた声が響いた。

「お嬢ちゃん？」

「あなたの奥さんを殺した奴は、あたしのパパとママも殺したの」搾り出すような聲音に、ギャンガルドは眉根を寄せた。

「キヤル、もしかして・・・？」

「そうよ。あたしが賞金稼ぎをする理由。それがその男よ」キヤルはギャンガルドに飛びついた。

「奥さんが殺された場所はどこー？」

その剣幕に、ギャンガルドは溜め息をついた。

「なあ、お嬢ちゃん。キヤロット？なんでお前さんの両親を殺した奴が、こいつを殺した奴と同じだと分かるんだ？特徴が似ているだけかもしだれねえだろ？」

「分かるわ！あなたの奥さん、服で隠してあるけど肩からばっさり切られてる。傷の方向からして後ろからよね。それで、このきれいな切り口。一緒なのよ！パパとママとー！」

遺体を見て、きれいねと呟いたのは、肩口から覗いた傷跡を見てのことだったのかと、セインは驚愕した。

「そして左頬の傷！口元から耳尻にかけてのものはずよ。あたしが付けた傷だもの。間違えようがないわ！」

掴み掛かるキヤルに首を振り、ギャンガルドは背を向けて歩き出す。

「とにかく、ここを出よつぜ。悪いが、そんな話をここいつの前でし

たくねえ」

はつとしたキヤルは、スカートの裾をぎゅっと握んで俯いた。

「ごめんなさい」

小さく呟いた言葉に、ギャンガルドはかすかに振り向いて笑った。

## 和合すれば暇は無し

外へ出ると、クイーン・フューリー号一同が、勢ぞろいで待っていた。

日は昇つて燐々と光を降り注ぎ、とうに朝が来ていたことを伝え、洞窟内とは打って変わって、さわやかな空気が肺を満たす。

肩にロープを担いでいたり、救急箱を抱えていたり、繩梯子を運んでいたりと、面々の、大そうな救助道具にギャンガルドは笑い、ラゾワは三人の顔を見て腰が抜けたようにしゃがみこみ、タカはキヤルに泣きついた。

あの、洞窟内での別際の騒動に、ラゾワは心底心配したらしい。船の乗組員全員かき集めて、援護ではなく、救助を求めたのだ。

「大げさだよまつたく」

笑いがおさまらないギャンガルドに、ラゾワが食つてかかつた。「だつてキャプテン、あれじやあ間違いなくキャプテンが悪者ですつて！」

怪我人に鎖を巻いてそのまま連れ去り、本来の目的だった、探しにいたはずの部下は置き去りにし。

「キャプテンのことだから、絶対楽しんでるだけだつて自信はあつたつすけど、相手が相手だし！お嬢なんか、まだぜんぜん子供なんスヨ？！」

興奮しそぎて語尾が裏返つている。

「ああ、わかつたわかつた、俺が悪かつたよ」

降参のポーズをとるギャンガルドに、ラゾワの次はタカが食つて掛かる。

「まったく、弁当食いそびれたつてみんなから苦情が来るし、その分また飯作んなきやいけなかつたし！キャプテンもう少し自重してくれねえと！」

「うー、俺お前にまで怒られるの？」

情けなくも眉尻を下げるギャンガルドに、タカは額を押さえて唸つた。

「うつわ自覚ないんだ！ キヤプテン今日の昼飯抜きー！」

「げ！」

もみくちゃである。

「あの、みんな。もうそれくらいにしてやつてくれないかな？」

おそるおそる、セインが口を挟んでみる。

確かにちやめちやだつたが、ギャンガルドにも、部下に知られたくない秘密があつたわけで。

結局は、その手伝いをさせられただけだから、今となつては、セインはそんなに怒つてはいなかつた。

だからといって、ギャンガルドを信用したわけでもないが。

「旦那！ あんな日に合つておいて、うつ、申し訳ねえ！」

「肩の傷は大丈夫かよ？」

わらわらと囲まれた。

「ああ、もう大分傷は楽だから、気にしないで。それより、タカ、君のお弁当、僕らも食べたんだ。食いはぐれた人がいるつて、ごめんね？」

「その謙虚さをキヤプテンに分けられたらなあ！」

「違ひねえ！ 分けるモンなら分けてくれねえか？！」

「む、無理だよ」

思わぬ再会がうれしかつたのだろう、我も我もと集まるものだから、背の高いセインが埋もれるほどだ。

「お嬢も大変だつたなあ」

セインと並んでいたキャラルも、必然と囲まれて、小さな彼女は早々に埋まってしまつていた。

「・・・どつちかつていうと、今のほうが大変だわ」

埋もれるだけ埋まつて、キャラルがぼそりと呟いた。

心なしか元気の無いキャラルに、タカは景気付けだとばかりに朝食を差し出した。

「腹が減つてんじゃねえかと思つてな。ちゃんとしたのは船に着いたら食わしてやるから、まずこれ食べな！」

元気がないときは食うに限る、とはタカの持論なのだが、人間、腹が減つていては思考も偏る。

バスケットの蓋を開けたとたんに、キヤルの目が輝いた。その様子を見ていた一人が、

「なんだ、お嬢もゲンキンだな！」

と言つたものだから、どつと笑いがあふれた。

その様子に、セインはほっと安堵の息を漏らす。

「おめえも苦労してんなあ」

「いや、僕もキヤルには助けられっぱなしですから」

田を細めてキヤルを見つめるセインに、ギャンガルドが、今度は溜め息をつく。

「な、何ですか？」

この二人は、自分達の気持ちに気がついているのかいないのか。特にセインに至つては、キヤルの言つとおり、年を食いすぎてボケてしまつているのだろうか。

「それにしても、すんげえ年の差だな？」

にやりとそんなことを言つぎヤンガルドに、セインは何のことだから分からなくて、首を傾げる。

「さつきから、いつたい何のことですか？」

「いんや？ 気にすんな。それより」

そんなセインの視線を一回かわし、もう一度、今度はずいぶん顔を近づけた。

「俺のカミさんのことについては、黙つとこてくれてありがとうよ」と、にかつと笑う。

話を上手く逸らされたような氣もするが、セインもひつひつと、微笑んで返した。

「いえ、あなたも、大変でしたでしょうに、キヤルのことまで気遣つていただいて」

「・・・」

「なんですか？」

自分の顔をまじまじと見つめながら固まるギャンガルドに、セインは訝しげに眉をひそめた。

「いや、怖くない微笑もできるんだなあ、と」

「・・・・あなた、僕をなんだと思ってるんです」

「できれば今からでもかつ攫つちまいたいくらい欲しい大賢者」即答で、けろりと返される。

「・・・・あ、そうですか」

「冗談なのか本気なのかといえど、彼のことなので本気なだらう。無理だとわかつていてるから手を出さないだけで。

やつぱりギャンガルドは苦手だと、セインは思つ。

人生を常に面白おかしく謳歌しようという心意氣は認めるが、人を巻き込むのは是非止めていただきたいものだ。

しかし、苦手といつても聞いておかなければならぬことがある。

ふう、と一呼吸して、セインは海賊王の目を見た。

「あの。あなたの奥さんですが・・・」

聞きにくいくことだが、確認を取らねばなるまい。

キヤルのためにも。

セインは声を小さくしてギャンガルドに訪ねた。

「ああ、多分、お嬢の言う男に、殺されたと見て間違いないだろ」「何故殺されたかといえば、多分に海賊王の伴侶だったからだらう。

「どうしようもない怒りだな。この感情は」

いつもの飄々とした表情は消えうせ、彼の瞳に、暗い光が宿る。

「復讐しようとは・・・?」

「・・・・・と思うが、だからといってあいつが帰つてくるわけでもねえ。旅先で、もしその男に会つことがあつたら、迷わず切り捨てるだらうがな」

静かに語るギャンガルドの口には、先ほどまでとは違つた、炎のような光が揺らめいていた。

「お嬢ちゃんの気持ちも分かる。経験者だからな。だからといってあんなちつせえ体に、なんくだらねえ重荷を背負わせる」ともないだろ」「

今度はにやりと、例のあの笑顔で、白い歯を見せる海賊王に、セインはまた笑った。

「本当に、掘み所がありませんね。あなたは」

「かっこいいだろ?」

「 わあ、やれせうひでしゅうひへ。」

笑いあう二人に、テツワがひしごと指を刺す。

「ああ！何を一人で楽しそうにしてるんすか！」

そんなやり取りをしてみると、これが

「うわあ、やな鳴き声聞こひき

「キャラ、それってもしかして……？」

セインの顔も青ざめた。

「もしかしなぐにて、そのもしかしてよ！」

わけの分からぬ二人の

「來た——！」

### 三つ足の巨大化

「何がお！」  
のんきなギャンガルドに、キャラルが叫ぶ。

「ロックカードよ見て分かるでしょう！？」

「いや、普通は分からぬと思ひよ?」

見たこともない伝説の巨大な鳥に、海賊達は色めき立つた。

ケエエエエエエエー！

また鳴れ声がすさまじい。

「うへえ！なんだあ？ありや

「うわうわうわ！」

急降下で襲つてくるのを、一斉に転げるよひに地に伏せてやり過  
ぐす。

「ああ！俺の髪！」

「禿げた！」

「タ力の仲間入りはごめんだ！」

「あんだとコラ！飯抜かすぞ！」

何人かが、頭を大きな爪に掠められて、髪の毛を剃られた。

「とにかく、撤退！」

穏やかだった空気は一転。

全員がクイーン・フュエイル号へと走り出した。

「あー、いろんなことがあってすっかり忘れてたわね  
とにかく何とか無事に島を離れてから、ぴたりとロックバードの  
襲撃は止み、やつとのことで、切れた息を整えた一行は、一気に脱  
力感に襲われた。

「そういうや、ロックバードがいるつて、旦那もお嬢も言つてたつけ  
な」

ラゾワがぼそりとそんなことを言つたので、仲間達から、そういう  
ことは早く言えだの、なんで忘れてるんだだの、ぼこぼこと頭を  
殴られている。

「日が昇ったから、出てきたんだねえ」

ズれた眼鏡を直して、太陽で手をかざすセインに、わけが解らな  
いというように、水をいっぱい飲み干してから、ギャンガルドが食  
つてかかった。

「昨日はいなかつたぞ？」

「あ、それ多分、僕らを襲つてたからじゃないかなあ？」

もう疲れた、というように、船の縁にのしかかつてだらしなく伸  
びるセインに、ギャンガルドは息をつきながらナルホドと納得した。

「あれ？ 何度かこの島を訪れているんじゃないの？ 君」

「今までだつて来てるが、あんなのはいなかつたぞ」

それは運がいいというべきか。

「あー、もしかして、一人で来てたでしょ？」

「…よく分かつたな。こつそり小船なんかで、こう、そそそと」

奥さんのことを探密にしていたなら、近くを通つた時なんかに、  
一人で訪れていたに違いない。

「だからだよ。小船だから、ロックバードも餌を運んでくる町の人  
たちと同じに見てたんだ」

「つて、それってえつと？」

引きつった笑みを浮かべるギャンガルドを、呆れ顔で見つめ返す。「ここの人たちが、あの島で鳥葬をしているのは知っているよね?」

「あー、やっぱりか」

聖域になつてゐるこの島を訪れるのは、亡くなつた人を運んでくる小船くらいのものだらうから、ギャンガルドが小船で訪れても、ロツクバードは餌を運んできた町人くらいにしか思わなかつたのだろう。だから襲つてこなかつたのだ。

「なんか、餌つてな・・・」

「ロツクバードにとつては、人の亡骸も餌つてことだよ。町の人気がどう崇めていようともね」

「まあ、それで食べてもらつて、天国へ行けるのなら、文句もないだろうしな」

物騒な会話を、海に向かつてしていれば、タカが一人の間に割つて入つた。

「何気持ちの悪い話してんスか」

「やあ、タカ。君のお弁当箱、あの島に置いて来ちゃつたよ」

再びの怪鳥の登場で、キヤルのカバンを死守するので手一杯だつた。何せあのカバンがなくなつてしまつたら、キヤルもセインも商売上がつたりで路頭に迷つ事この上ない。おまけにキヤルに殴られるに決まつているのだ。

旅の不便なところは、大事なものまで一緒に持ち歩かなければならぬことだ。

例えば身分証明にもなるキヤルのハンターパスとか、商売道具（いわゆる各種銃火器）やら通帳やら財布やら。

おまけにキヤルの着替えからお気に入りの小物まで。ぎつしりと詰まつてゐるので、小さな車輪が付いているとはいえ結構な重さなのだ。

「今は僕が持ち運んでるけど、前はキヤル一人で持ち歩いてたんだよな」

キヤルつて凄いなあ、などと、今更ながら変なところで感心して

しまつセインだつた。

「そんなことより、お嬢も田那も、もちろんフウエイルで陸まで行くんだろ?」

そうだった。島に上陸したときにもうつたポートは、あの騒動で島に置いてきてしまつたままだ。

「じめん、ギヤンガルド」

「つぐ、素直にあやまんよ。鳥肌立つちまつ

「そうですよ田那。あんなくらこの船だったら、俺たち自分で作つちまつから気にすることはねえ」

どうやらクイーン・フューチュールに備えてある小船は、全て乗組員が暇つぶしに作ったものらしい。

「へえ! 淫いんだね」

「そんなことねえよ」

驚くセインに、タカは照れて禿げ頭を搔く。

「まあ、そういうことだから、船のことは気にすんな

「さうよセイン。乗せて行つて貰わなきゃ、陸まで帰れないんだか

「う

セインの脇から、キヤルが顔を出して、三人の男の間に遠慮なく、ぐいぐいと入る。

「でもキヤル、小船をなくしてしまつたのは事実だし」

「タカが気にするなつて言つてくれたわ。それに、誘拐されたり拉致されたり監禁されたり脅されたり弄ばされたりした代償としては安いくらいよ」

鼻息も荒く、金髪の少女はふんぞり返る。

「うわあ、思いつきり変質者な犯罪者みついすね、キャプテン」

罪名がいちいち怪しいのはどうしたものか。

「ませつかえすんじやねえ! 抵抗できねえだろ? がー!」

「いひやいつしゅ、ひやふひえん」

つねつて伸ばされて、両頬がびろんと伸びたままタカがしゃべるので、変な単語になる。どうやら、痛いつす、キャプテン、とか言

つているらしい。

ともあれ、セインとキヤル、ギャンガルド一行は、再びクイーン・フューエイル号に乗つて、短い間だが、航海を共にすることになった。相変わらず、ギャンガルドは信用されていないようで、セインもキヤルも、彼だけには警戒心むき出しだったが。

その間、セインたちの地図と、海図をラゾワが見比べて、島の灯台もどきは当時のあの国の人たちに逃げ道を指示示すものであつたことも判明したりと、ちょっとした発見もあつたりした。

また、船の上ではあだ名で呼び合うものだと誰かが言い始め、セインの呼び名は大賢者にあやかつて、グラントローヴァから、グラン（本人はお爺さんみたいだからやめてくれと最後まで抵抗した）となり、キヤルは二つ名からとつて、ローズ（なんだかサスペンス小説ですぐに死んじゃう水商売の女みたいだからやつぱりやめてと本人は抵抗気味）と、勝手に呼び名を決められた。

しかし、ラゾワの本名がラルクント・ラゾッドだったのはまだいいが、タカの本名がキースウェル・ハートだったことには納得がいかないキヤルだった。

これであんたらもクイーン・フューエイルの乗組員だと言われたのは素直にうれしかつたが。

でも結局、呼びなれてしまったのは”旦那”と”お嬢”だったの

で、そう呼ばれるこの方が多くて、安心した一人だった。

ギャンガルドを除く海賊達と、そんな妙な親睦まで深めて、二人は次の港町で船を下りた。

最後に、ギャンガルドがもう一度セインとキヤルを誘つたが、それはやっぱり無下に断られて終わつたりした。

大勢と過ごした時間は短かつたが楽しく、キヤルが両親を殺した男のことを口にしなくなつっていたことに、セインは内心ほつとしていた。

賑やかな海の生活と、珍しい魚やタカのつくる美味しい料理など

で、気をそらしてくれたならそれでいい。ひと時でも、キャラに楽しい時間を提供してくれたクイーン・フュエイルの皆さん、セインは心から感謝した。

このまま忘れていてくれればいいと思うが、彼女が賞金稼ぎを続ける限り、それはありえないのだ。

次に訪れた宿屋は、海の見える高台にあった。

窓から、港に浮かぶ帆船が見える。

目を細めて懐かしそうに海を眺めていたセインが、ふと、視線を室内に戻した。

「ああ、そうだ。キャラ」

「何？」

別れ際。

ギャンガルドがセインに言った言葉を、今思い出したのだ。

それをキャラに耳打ちする。

一人でくすくす笑いあつた。

「まったく、本当に油断も隙もないんだから」

「まさか、しつかりバレているとは思わなかつたよねえ？」

船を降りるセインを呼び止めて、にやりと笑つてギャンガルドが言った言葉。

『早くお嬢と一緒にになって、気兼ねなく平和に暮らせる楽園なんかが見つかるといいな？』

一緒になつて、というところ、もしかして結婚、という意味が込められているのだろうかとセインは思いつつ、何でもお見通しの海賊王が、ああ見えて実はお節介焼きなことに、二人で笑いあつた。

「さて、次はどこへ行きましょつか？」

「そうだねえ？」

今度は、二人一緒に買って来た地図を広げ、頭をつり合わせてお茶をすすつた。

セインの淹れたお茶はやつぱりおいしい。

キヤルが、窓から差し込むオレンジ色の光に、目を眇めて外を見やる。

今日の夕焼けはきれいだから、明日はきっと良い天気になるだろう。

「あ、そういう。あのエルグランド島の獣達ね。ギャンガルドが開放したらしいよ？奥さんの墓を守らせるんだって」

「げ。じゃあ、あの島、今天然サファリパークなわけ？」

「街の人たちどうするんだろうねえ？」

「・・・まあ、いいけど？」

ちょっととしたオマケもついたが、海賊のおかげで、なんだかエルドラドに近づいたような気がした。

## 樂園へ続く道（後書き）

これで一応一括り終了です。

文庫本一冊分、お付き合いいただきましてありがとうございました。素人が書いたもので、最後まで読んでくださった方には本当に、拙くて申し訳ないです。それでも自分で楽しんで書き上げることができましたが、ど、どうでしょう？感想をいただけると本当にうれしいです。

要望が、思つたよりもいただけましたので、続編を執筆することになりました。<http://ncode.syosetu.com/n7713a/>で続編へ飛ぶことができます。いかがでしょうか。お願ひいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5896a/>

---

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！

2010年10月8日13時23分発行